

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第322集

雀居遺跡1

—第2次調査の報告—

1993

福岡市教育委員会

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第322集

雀居遺跡1

—第2次調査の報告—



遺跡調査番号 9131

遺跡略号 SAS2

1993

福岡市教育委員会

序

福岡市の都心部、天神の東方約6km、博多駅の東方約3kmに位置する福岡空港は、国の拠点空港のひとつであり、交通、情報、経済活動の拠点となっています。近年、乗降客数、航空貨物輸送とも著しい伸びを示し、また、アジア・太平洋の経済・文化などの交流の窓口として、今後ますます我が国の航空輸送体系に重要な役割を果たすことが期待され、整備が進められています。

このたび、国際線整備に伴うエプロン増設工事に際し、雀居遺跡群の一部を発掘調査いたしました。

調査の結果、古代の溝や土坑群、条里地割に伴う大溝や水田址、木簡など貴重な遺構・遺物が数多く発見されました。

本書は、これら発掘調査の成果を収録したものです。本書が、埋蔵文化財に対する市民の方々のご理解、さらには学術研究上役立つことができれば幸甚に存じます。

最後になりましたが、発掘調査から整理に至るまで運輸省第四港湾建設局をはじめ、多くの方々のご理解とご協力を賜わりましたことに対し、心より感謝の意を表します。

平成5年1月

福岡市教育委員会

教育長 井口雄哉

例　　言

1. 本書は、福岡空港国際線整備に伴い、運輸省第四港湾建設局の受託事業として福岡市教育委員会が1991（平成3）年10月18日から1991年12月28日にかけて発掘調査を実施した、雀居遺跡群の第2次緊急発掘調査の報告書である。
2. 本書に収録した発掘調査の記録は、諸般の都合上、古代の遺構群と土師器を中心としたものである。石製品、木製品、植物種子の分析報告については次回の報告に掲載したいと考えている。
3. 遺構の呼称は記号化し、土坑→S K、井戸→S E、溝→S D、その他の遺構→S X、ピット→S Pとした。なお、遺構番号は種類に関係なく連番とした。ただし、S PはS Pだけで番号を付している。
4. 本書に使用した遺構図作成及び現場写真撮影、遺物実測図作成は、下村智、上方高弘があたった。整図は、下村の他、荒牧宏行、上方高弘、安野良、副田則子、鳥飼悦子、塩沢美子、坂木智子が行なった。遺物写真の撮影は上方高弘による。
5. 本書で用いる遺構図の方位は全て磁北である。また、レベル高は、第四港湾建設局博多港工事事務所が空港内に設置したH=6,001mから移動した。
6. 雀居遺跡群第2次調査に係る遺物・記録類（図面、写真、スライドなど）は、報告終了後、福岡市埋蔵文化財センターで収蔵・管理される予定である。
7. 本書の執筆・編集は、下村が行なった。

遺跡調査番号	9131	遺跡略号	S A S 2		
調査地地籍	博多区福岡空港内		分布地図番号	022	
開発面積	8,364m ²	調査対象面積	1,739m ²	調査実施面積	1,700m ²
調査期間	1991年10月18日～1991年12月28日		事前審査番号	2-1-432	

本文目次

序

Iはじめに	1
1 調査に至る経過	1
2 調査の組織	1
II遺跡の立地と環境	3
III調査の記録	5
1 売坑	7
2 井戸	29
3 溝	31
4 潟状遺構	38
5 第Ⅱ面出土遺構他	39
IVおわりに	40

挿 図 目 次

Fig. 1	周辺遺跡分布図 (1/25,000)	2
Fig. 2	調査地点周辺旧地形図 (1/20,000) (明治33年)	4
Fig. 3	調査区配置図 (1/800)	5
Fig. 4	試掘調査出土遺物実測図 (1/3)	6
Fig. 5	第I面遺構配置図 (1/200)	折込
Fig. 6	第II面遺構配置図 (1/200)	折込
Fig. 7	S K 102遺構実測図 (1/60)	7
Fig. 8	S K 102上層出土遺物実測図 (1/4)	7
Fig. 9	S K 102下層出土遺物実測図 (1/4)	8
Fig. 10	S K 103~105遺構実測図 (1/60)	9
Fig. 11	S K 106~112遺構実測図 (1/60)	11
Fig. 12	S K 111~114出土遺物実測図 (1/3)	12
Fig. 13	S K 113・114・116・119遺構実測図 (1/60)	13
Fig. 14	S K 120~126遺構実測図 (1/60)	15
Fig. 15	S K 127~130・132・133遺構実測図 (1/60)	17
Fig. 16	S K 130~133出土遺物実測図 (1/3)	18
Fig. 17	S K 134~137遺構実測図 (1/60)	19
Fig. 18	S K 138~140・142~147遺構実測図 (1/60)	21
Fig. 19	S K 148~153遺構実測図 (1/60)	23
Fig. 20	S K 154・156~160遺構実測図 (1/60)	25
Fig. 21	S K 162~168・170~174遺構実測図 (1/60)	27
Fig. 22	S K 154・157~159・164・166・174出土遺物実測図 (1/3)	28
Fig. 23	S E 118・131遺構実測図 (1/60)	29
Fig. 24	S E 141遺構実測図 (1/60)	30
Fig. 25	S D 101・115・117上層断面実測図 (1/60)	32
Fig. 26	溝遺構配置図 (1/200)	折込
Fig. 27	S D 101出土遺物実測図 (1/3)	33
Fig. 28	S D 101・117出土縄繩・木簡実測図 (1/2)	33
Fig. 29	S D 115出土遺物実測図 (1/3)	34
Fig. 30	S D 117出土遺物実測図 (1/3)	35

Fig.31 S X155出土遺物実測図 (1/3)	36
Fig.32 S X155造構実測図 (1/60)	37
Fig.33 第2調査面他出土遺物実測図 (1/3)	38

図 版 目 次

- PL. 1 (1) 第1面調査区全景 (北から)
 (2) 第1面調査区全景 (西から)
- PL. 2 (1) S K102造構出土状況 (北から)
 (2) S K102造構出土状況 (東から)
- PL. 3 (1) S K104土層堆積状況 (東から)
 (2) S K104造構出土状況 (南から)
- PL. 4 (1) S K105土層堆積状況 (東から)
 (2) S K105造構出土状況 (南から)
- PL. 5 (1) S K106土層堆積状況 (西から)
 (2) S K107土層堆積状況 (北から)
- PL. 6 (1) S K108造構出土状況 (西から)
 (2) S K109・110造構出土状況 (北から)
- PL. 7 (1) S K111土層堆積状況 (東から)
 (2) S K111造構出土状況 (東から)
- PL. 8 (1) S K112造構出土状況 (東から)
 (2) S K113造構出土状況 (南から)
- PL. 9 (1) S K114造構出土状況 (東から)
 (2) S K116土層堆積状況 (南から)
- PL. 10 (1) S K119土層堆積状況 (西から)
 (2) S K120土層堆積状況 (西から)
- PL. 11 (1) S K121土層堆積状況 (北から)
 (2) S K121遺物出土状況 (東から)
- PL. 12 (1) S K122土層堆積状況 (東から)
 (2) S K123土層堆積状況 (北から)
- PL. 13 (1) S K124土層堆積状況 (南から)
 (2) S K125土層堆積状況 (東から)

- PL.14 (1) S K126上層堆積状況（南から）
(2) S K126遺構出土状況（東から）
- PL.15 (1) S K127土層堆積状況（北から）
(2) S K127・128遺構出土状況（南から）
- PL.16 (1) S K129土層堆積状況（北から）
(2) S K130遺構出土状況（南から）
- PL.17 (1) S K134土層堆積状況（南から）
(2) S K134遺構出土状況（南から）
- PL.18 (1) S K137遺構出土状況（南から）
(2) S K142土層堆積状況（西から）
- PL.19 (1) S K143土層堆積状況（東から）
(2) S K143遺構出土状況（東から）
- PL.20 (1) S K146土層堆積状況（東から）
(2) S K147土層堆積状況（東から）
- PL.21 (1) S K148遺構出土状況（西から）
(2) S K154土層堆積状況（北から）
- PL.22 (1) S K149土層堆積状況（南から）
(2) S K149遺構出土状況（南から）
- PL.23 (1) S K151土層堆積状況（東から）
(2) S K151遺構出土状況（東から）
- PL.24 (1) S K152土層堆積状況（北から）
(2) S K152遺構出土状況（北から）
- PL.25 (1) S K153上層堆積状況（東から）
(2) S K153遺構出土状況（東から）
- PL.26 (1) S K158土層堆積状況（西から）
(2) S K158遺構出土状況（西から）
- PL.27 (1) S K162上層堆積状況（西から）
(2) S K162遺構出土状況（東から）
- PL.28 (1) S K164遺物出土状況（東から）
(2) S K165遺構出土状況（北から）
- PL.29 (1) S K166遺構出土状況（北から）
(2) S K175土層堆積状況（北から）

- PL.30 (1) S K167土層堆積状況（西から）
(2) S K167遺構出土状況（東から）
- PL.31 (1) S K170土層堆積状況（西から）
(2) S K170遺構出土状況（西から）
- PL.32 (1) S E118遺構出土状況（北から）
(2) S E131遺構出土状況（北から）
- PL.33 (1) S K132土層堆積状況（南から）
(2) S E141遺構出土状況（東から）
- PL.34 (1) S D101IV区土層堆積状況（西から）
(2) S D101北壁土層堆積状況（南から）
- PL.35 (1) S D101II区木製品出土状況（東から）
(2) S D101V区木製品出土状況（北から）
- PL.36 (1) S D115上層堆積状況（西から）
(2) S D169遺構出土状況（西から）
- PL.37 (1) S D117北側土層堆積状況（北から）
(2) S D117III区木筒出土状況（北から）
- PL.38 (1) S X155土層堆積状況（東から）
(2) S X155遺構出土状況（東から）
- PL.39 (1) 調査区中央部基盤粗砂堆積状況（南から）
(2) 調査区中央部基盤粗砂堆積状況（西から）
- PL.40 (1) 第II面調査区全景（北から）
(2) 第II面調査区全景（西から）
- PL.41 (1) 第II面杭列出土状況（南から）
(2) 第II面水田畦畔出土状況（南から）
- PL.42 (1) 第II面B2区遺物出土状況（西から）
(2) 第II面B2区水田面遺物出土状況（西から）
- PL.43 (1) 第II面B2区水田面ヒョウタン出土状況（西から）
(2) 第II面水田面足跡出土状況（南から）
- PL.44 出土遺物(1)
- PL.45 出土遺物(2)
- PL.46 出土遺物(3)
- PL.47 出土遺物(4)

PL.48 出土遺物 (5)

PL.49 出土遺物 (6)

PL.50 出土遺物 (7)

I はじめに

1 調査に至る経過

我が国の拠点空港のひとつである福岡空港は、近年乗降客数・航空貨物輸送量が増大し、今後ますます機能充実が期待されているところである。運輸省第四港湾建設局では、現在、空港西側地区を国際線ターミナル・貨物ターミナルとして整備を進めているところであるが、恒久的な施設建設が中心になるため、市教育委員会埋蔵文化財課では、埋蔵文化財の取り扱いについて関係部局と協議をかさね、これまで空白であった空港内の遺跡確認作業を行なうことになった。先ず、空港西側地区全域を対象に1991（平成3）年6月15日から8月3日にかけて39箇所の試掘坑を設け、遺跡の確認調査を行なった。調査の結果、数地点で弥生時代から中世にわたる遺物が出土し、特に、エプロン増設工事予定地には、平安時代後期を中心とする遺構・遺物がまとまって出土した。そこで、試掘結果をもとに関係部局と遺跡の取り扱いについて協議を行ない、平成3年度分工事範囲8,364m²の内、遺跡の分布する1,739m²を対象に埋蔵文化財の本調査を行なうこととした。本調査は、第四港湾建設局の受託事業として1991（平成3）年10月18日から同年12月28日にかけて実施した。

2 調査の組織

調査委託：運輸省第四港湾建設局

調査主体：福岡市教育委員会 教育長 井口雄哉

調査総括：埋蔵文化財課長 折尾 学 埋蔵文化財第2係長 塩屋勝利

調査庶務：埋蔵文化財第1係長 飛高憲雄 担当 寺崎幸男

事前書査：主任文化財主事 井澤洋一 文化財主事 渡本正志（前任） 吉武 学

調査担当：埋蔵文化財第1係 常松幹雄（試掘調査） 埋蔵文化財第2係 下村 智

調査補助：上方高弘

調査作業：大神嘉彦、高田 茂、徳永榮彦、仲田忠孝、山部増人、上野龍夫、内野弘行、広田熊雄、藤野保夫、別府俊美、吉住作美、石川文夫、永川カツエ、江嶋光子、川上すしえ、黒瀬千鶴、鳴 ヒサ子、菅野シゲ、長浦英美子、永利咲江、永松トミ子、本多ナツ子、宮原つや子、村田トヨ子、安高久子、山下智子、山村スミ子、山本代代、松井良子、武田潤子、西本スミ、野口ミヨ、日尾野典子、安野 良、副田則子、古村知子 他

整理作業：上方高弘、安野 良、副田則子、吉村知子、長浦英美子、宮原つや子、宝以佐子



Fig.1 周辺遺構分布図(1/25,000)

- | | |
|-----------------|------------|
| 1 鶴居遺跡(第2次調査地点) | 6 調査B遺跡群 |
| 2 博多遺跡群 | 7 板付遺跡 |
| 3 比志遺跡群 | 8 金隈遺跡 |
| 4 那珂遺跡群 | 9 市川赤穂／浦遺跡 |
| 5 五十川遺跡群 | 10 青木遺跡群 |

山本正子、鳥飼悦子、塩沢美子他

II 遺 跡 の 立 地 と 環 境

福岡空港は、1944（昭和19）年旧陸軍席田飛行場として建設され、敗戦後は占領軍の管轄下におかれた。1951（昭和26）年民間の国内線航路が開設され、現在では我が国の主要な国際空港として躍進を続けている。1972（昭和47）年までは米軍の板付基地となっていた、民間人の立ち入りは厳しく制限されていた。そのため、遺跡の分布についてはまったくの空白地帯であった。しかし、空港建設時、工事に携わった人々の言い伝えによれば、切土の際、豪棺墓や住居址状に土器片が丸く分布する地域があり、遺跡が存在していたという。

今回、米軍撤退後の西側地区が整備されるのに伴い、試掘調査を実施したところ遺跡が発見されたので、雀居（ささい）遺跡群と命名した。雀居遺跡群は、御笠川の右岸に広がっている遺跡群で、西側地区だけでも3地点以上に分かれて分布しているものと考えられる。

今回調査した第2次調査地点は標高5.0m前後で、現在は造成で平坦地になっているが、古い地形図に依れば南側に集落があり、周辺には水田が広がっている状況であった。条理地割の遺構が残り、集落はやや微高地となっている。

調査地点の東方1km強には席田丘陵が南東から北西に向って延びており、席田遺跡群が分布する。以前豪棺墓が発見された青木豪棺遺跡、銅鐸の鋳型が発見された赤穂ノ浦遺跡、梁行5間、桁行8間の巨大な弥生中期の掘立柱建物が出土した久保園遺跡、青銅製鋤先や青銅鏡が出土した大谷遺跡、前漢鏡が副葬されていた宝満尾遺跡などがあり、やや南に下ってゾホウラの貝輪を副葬した大豪棺墓地の金隈遺跡などがある。

西方2kmには、春日丘陵から延びた那珂・比恵の台地部が広がり、福岡平野の主要な遺跡群を形成している。これらの台地上には、後期旧石器時代から中世までの遺跡が連続とみられ、特に、弥生時代から古代にかけての遺構密度が非常に高い。那珂遺跡では、近年弥生中期後半代の環濠が発見（第20次・23次）され、筒形器台を含む多数の祭祀土器群と銅戈の鋳型群が出土している。銅戈の鋳型は那珂八幡古墳の調査でも出土し、第8次調査では銅矛の中子と取瓶片なども出土しており、青銅器鋳造の中心のひとつがこの那珂台地にあったことが明らかになった。

また、古墳時代後期から終末にかけての掘立柱建物群や初期瓦の出土、古代の溝や掘立柱建物群・井戸の出土も注目される。最近では、縄文晩期の二重環濠が出土し、環濠の出現期をさらに遡らせる結果になった。比恵遺跡では、細形銅劍を副葬した豪棺墓地群、古墳時代後期の大倉庫群や南面する大型掘立柱建物、弥生前期の貯蔵穴群、弥生中期後半の木臼やヤシの実容器の出土など重要な遺構・遺物が発見されている。

南方2kmには、初期稻作農耕で有名な板付遺跡が広がり、北方には、中世の港町博多遺跡群や箱崎遺跡群が広がっている。雀居遺跡群の周辺には重要な遺跡群が数多く分布している。

III 検査の記録

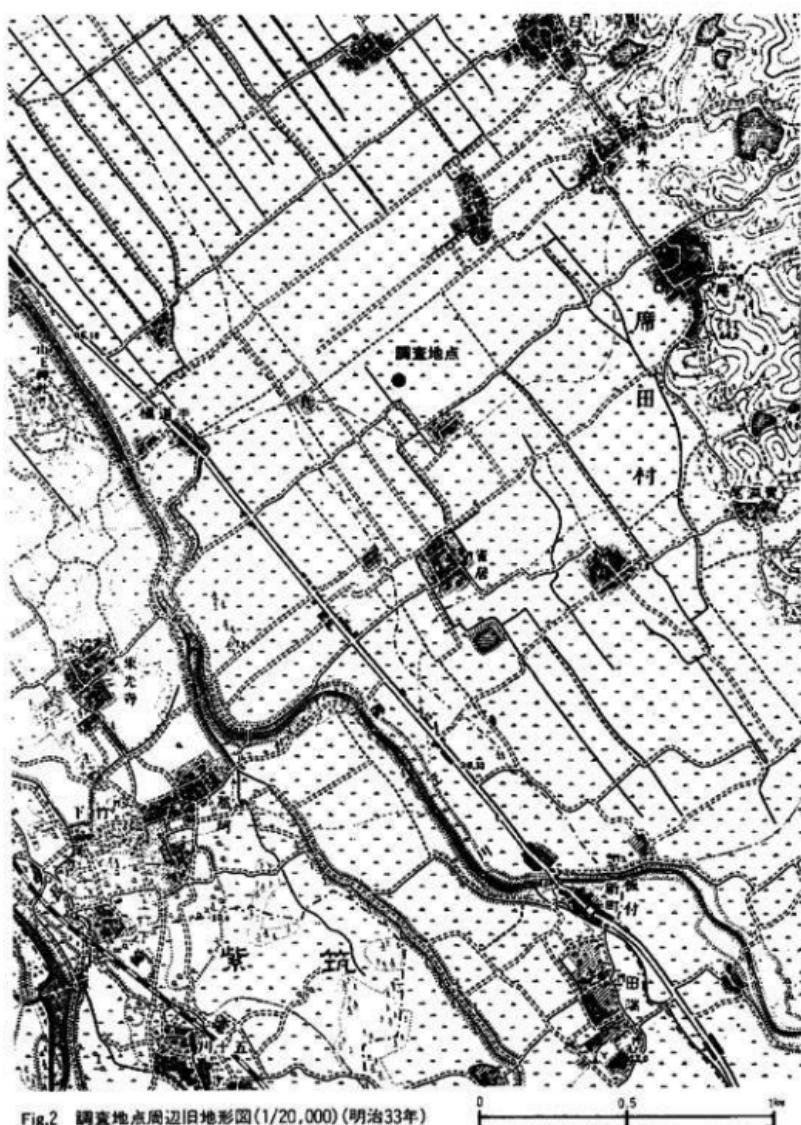


Fig.2 調査地点周辺旧地形図(1/20,000)(明治33年)

III 調査の記録

概要

1991年6月5日から同年8月3日にかけて実施した試掘調査は、雀居遺跡群の第1次調査とする。今回実施した調査は第2次調査ということになる。調査面積は1700m²で、上下2面の遺

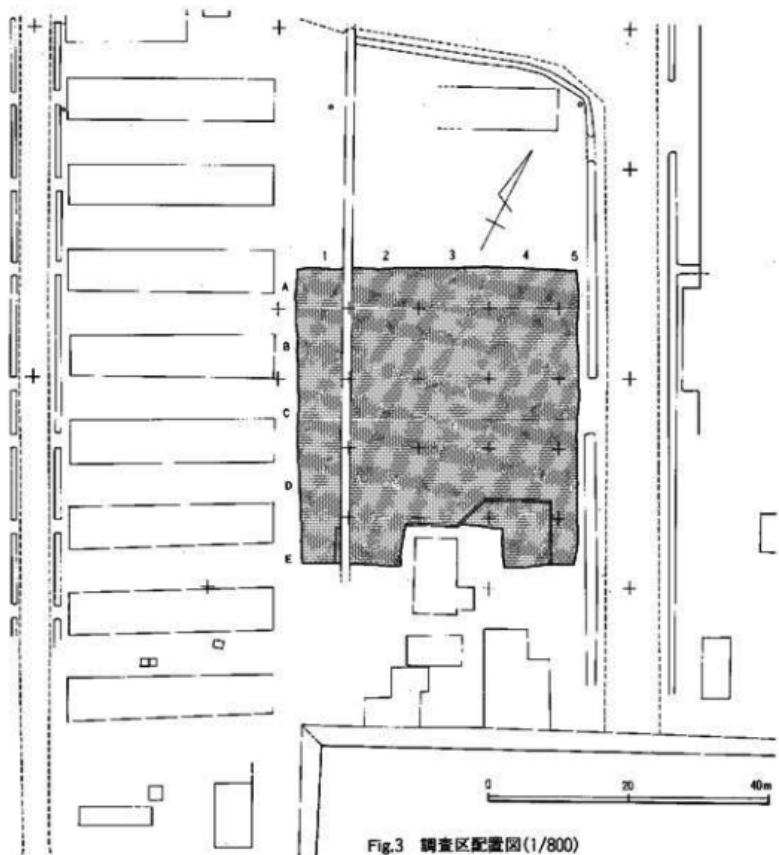


Fig.3 調査区配置図(1/800)

III 調査の記録

構群が検出された。

第Ⅰ面は、標高4.45m~4.15mを測り、淡青灰色シルトと褐色砂層を基盤として、土坑66基、溝5条、井戸3基、溜状遺構1基、ピット47個が確認された。土坑は、径1m前後から4mを越えるものまであり、円形、楕円形、略方形、不定形を呈し、断面は皿状に深む。井戸は、素掘りのものと井筒に曲物を用いるものとがある。溝は、南東から北西に流れる自然流路と、北西-南東方向、西南西-東北東方向をとる2条の区画溝がある。区画溝は、幅1.8~3.0m、深さ0.3m前後である。

第Ⅱ面は、標高4.15~3.65mで水田址と溝が確認された。黒色粘質土が基盤となっている。畦畔、足跡が良く残っており、畦畔はT字状に接合している。溝は幅16.3mの大溝で、南東から北西側に流れている。西岸には護岸用の枕列が27mにわたって検出された。

Fig. 4は、第1次の試掘調査で出土した遺物である。殆どが第2次調査のSK102上層に属するものである。1~3は土師皿である。口径10.4~10.6cm、器高1.8~2.3cmで、底部はヘラ切りである。1は淡褐色~淡黄褐色を呈し、外底面に板目压痕が残る。4は黒色土器の底部である。底径5.8cmで内面にはヘラ磨きが施される。5は土師器塊の底部で、底径7.3cm、貼り付けの高台が付く。淡黄褐色を呈し、焼成は良くない。6も土師器塊である。口縁部と体部を半分以上欠失するが、宍形に復元できる。口径は13.8cm、器高5.8cm、底径7.3cmを測る。淡黄灰色を呈し、胎上は精良で焼成も良い。7は越州窯の青磁碗である。底径7.7cmで、見込みに沈圓線がめぐり目跡が残る。高台疊付にも重ね焼きの目跡が観察される。釉は暗灰緑色でうすくかかる。8は100m北側の17号トレンチから出土した白磁碗である。口径18.0cm、器高7.1cm、底径6.1cmを測る。内面に沈圓線がめぐり、黄灰色の釉がかかる。底面に墨書きみられる。

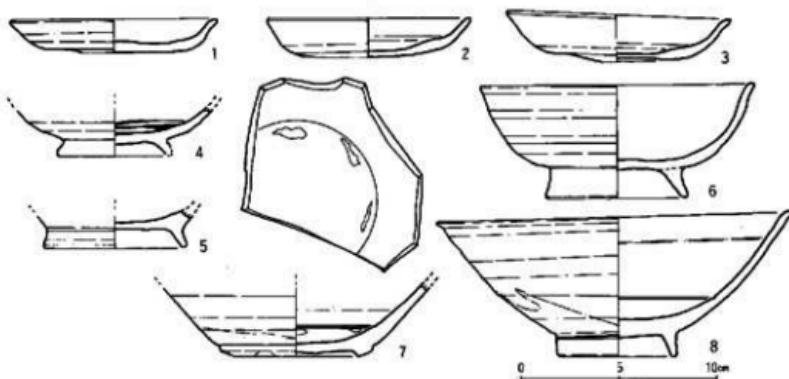


Fig.4 試掘調査出土遺物実測図(1/3)

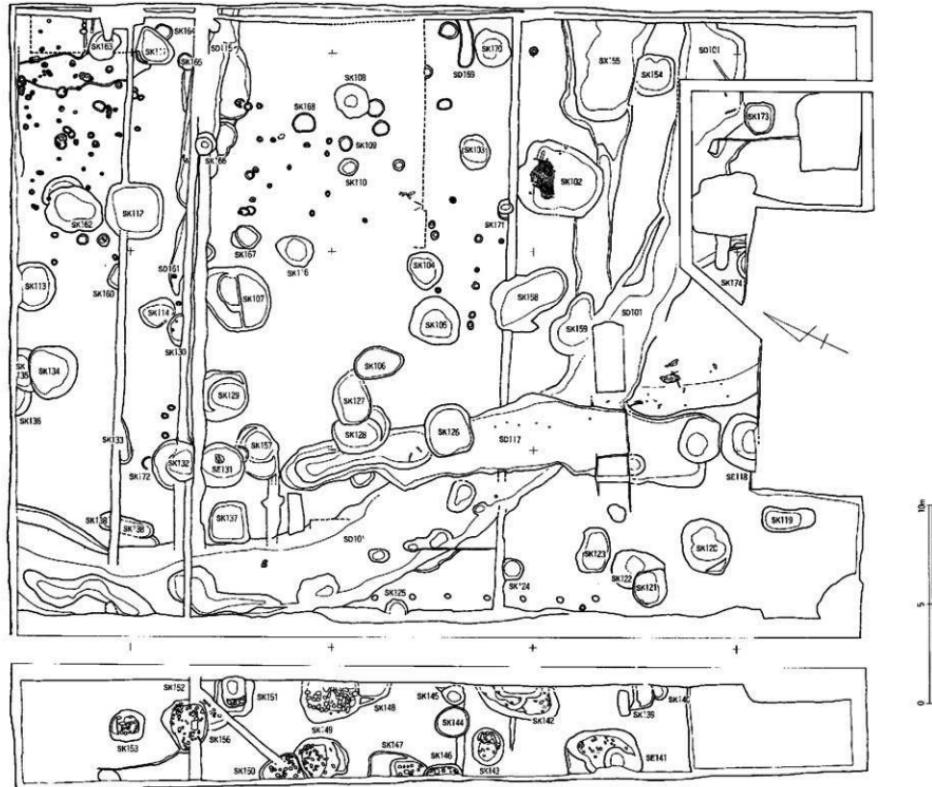


Fig.5 第1面造構配図(1/200)

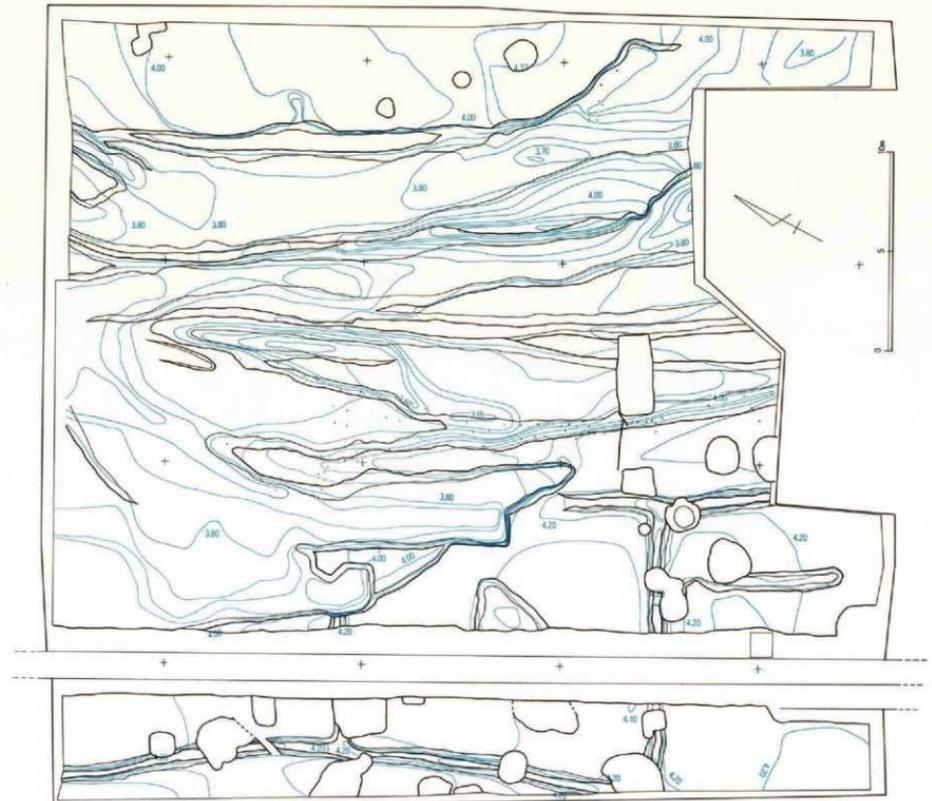


Fig.5 第II回造構配置図(1/200)

1 土坑

SK102 (Fig. 7 ~ 9, PL. 2・44) 調査区南東部に位置する略方形の堅穴状遺構である。主軸をほぼ東北にとり、南北4.2m、東西3.6m、深さ0.3mを測る。土層は、1 淡黄灰色砂質土(上層)、2 黒色灰層(下層)、3 暗灰色粘質土、4 暗灰色粘質土、5 黒茶褐色有機質土(下層)、6 暗灰色砂質土、7 黒灰色粘質土、8 黒灰色シルト質土となっている。第5層の有機質土中には、小屋掛け状の施設が潰れた状態で出土した。南側は確認せず掘り下げてしまったが、北側では4本の木枝の根元を地中に

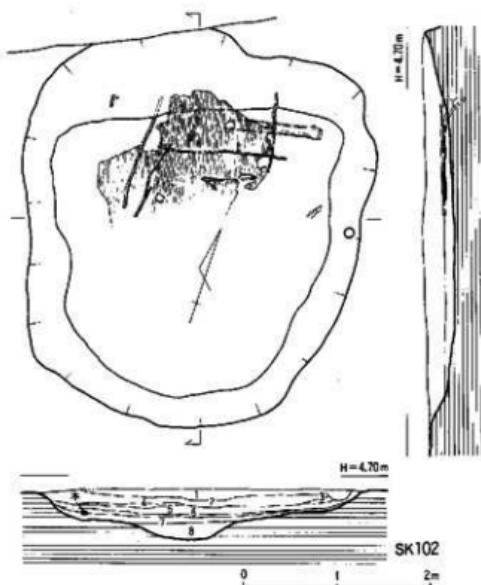


Fig.7 SK102遺物実測図(1/60)

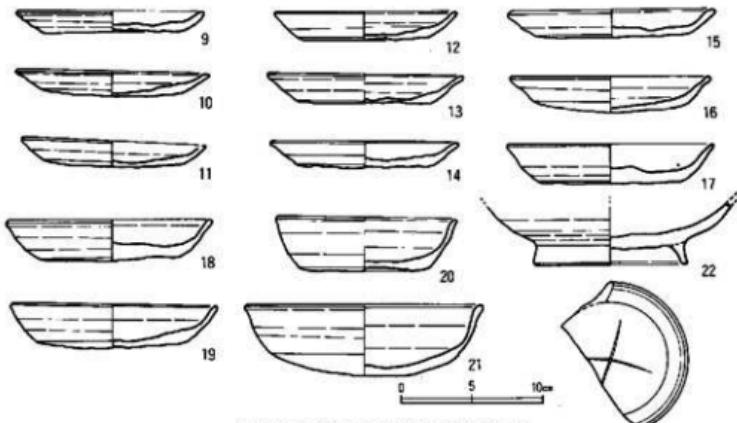


Fig.8 SK102上層出土遺物実測図(1/4)

1 土坑

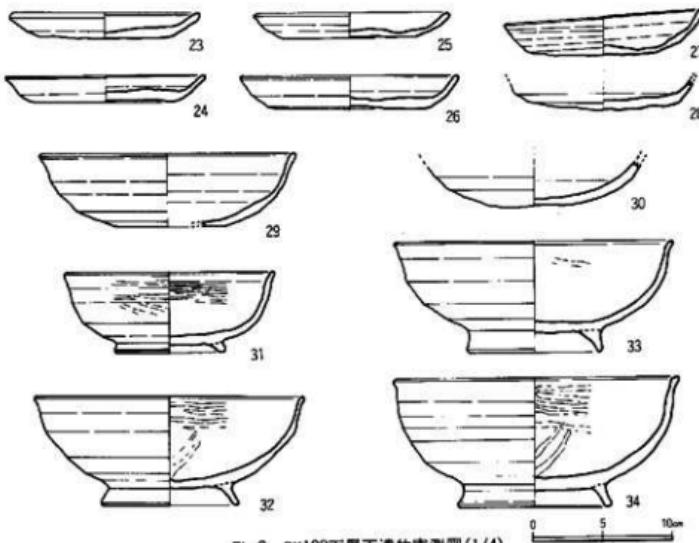


Fig. 9 SK102下層下遺物実測図(1/4)

差し込み、さらに横木を渡して架構し、上からアシを葺き下ろした状態が検出された。

遺物は主に第1層（上層）と第2層（下層）からまとまって出土した。上層からは、土師器の皿・壺・塙、滑石製の石鍋片、炭化したコメ・ムギ、馬齒が出土し、下層からは土師器皿・壺・塙と炭化したコメ、未炭化のモミガラ、加工木材などが出土した。遺物の殆どは小屋掛け状の施設が潰れた後に堆積したものと考えられる。

Fig. 8は上層出土の遺物群である。9~19は土師器皿である。9~16までと17~19までの大きくふたつのタイプに分けられる。9~16は口径9.8~11.0cm、器高1.2~2.0cmで、16を除けば器高は1.5cm前後である。底面はヘラ切り放しで、殆どに板目痕が付く。色調は淡灰褐色を呈し、胎土は精良で焼成良好なものが多い。16の内面にはススが付着する。17~19は口径10.9~11.0cm、器高は2.1~2.5cmを測り、器壁が厚く器高が高い。底面はヘラ切り放しで、板目痕が付く。色調は淡灰褐色を呈し、胎土は精良で焼成は良好である。17の内面と19の口縁部内面4ヶ所にススが付着する。20・21は土師器の壺である。20は口径9.6cm、器高3.0cmの小型で、外面にススが付着している。21は口径12.6cm、器高3.8cmで明灰褐色を呈し、底面にヘラ調整が施される。22は内黒土師器塙の底部で、底面に十字のヘラ描文が施されている。

Fig. 9は下層出土の遺物群で、29を除いて他は全て第2層出土である。23~28は土師器皿で

ある。口径10.0~11.6cm、器高1.1~2.4cmで、27は器高がやや高い。底部調整はヘラ切り放しで、全て板目圧痕が付く。色調は淡灰褐色を呈するものが多いが、26・28は灰褐色である。25の内面にはススが付着し、黒褐色に変色している。29は第4層出土の环である。口径13.6cmで淡灰褐色を呈し、底部はヘラ切り調整である。30も环底部である。31・32は墨色の土師器壇で、31は口径1.2cm、底径5.9cm、器高4.3cmの小型である。灰黑色を呈し、内外面ともヘラ磨きが施される。32は口径14.3cm、器高5.3cmで、外面黒褐色、内面灰黑色を呈する。31・32とも胎土は精良で、焼成も良い。33・34は内面黒色の上師器壇である。33は口径12.8cm、器高5.9cmを測り、外面淡灰褐色、内面灰黑色を呈する。34は口径15.2cm、底径8.2cm、器高6.9cmを測り、外面は淡灰褐色、内面は灰黑色から茶褐色を呈する。33・34は胎土が精良で、焼成も良い。内面にはヘラ磨きが施される。SK102は、下層出土遺物が10世紀後半代とみられ、上層出土遺物はそれよりもやや新しい時期に属すると考えられる。

SK103 (Fig.10, PL. 3) 調査区東側で検出したやや楕円形を呈する小型の土坑である。長径1.75m、短径1.5m、深さ0.5mを測る。出土遺物は極端に少なく、土師器の皿片が2片出土しているに過ぎない。

SK104 (Fig.10, PL. 3) 調査区中央部で検出された土坑である。やや楕円形を呈し、長径1.9m、短径1.6m、深さ0.35mを測る。土層堆積状況は単純で1淡黄灰色シルト質土ブロック混入灰色砂質土、2暗灰色

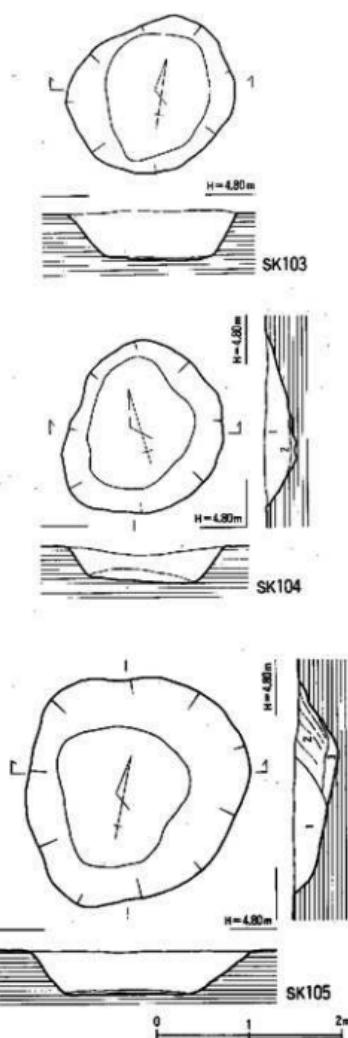


Fig.10 SK103~105遺物実測図(1/60)

粘質土となっている。遺物は極端に少なく僅か土師器塊片が1片出土しているに過ぎない。

S K105 (Fig.10, PL. 4) S K104の西隣りに位置する。やや円形に近い形を呈し、東西、南北とも2.4m、深さは0.45mである。上層堆積は、1暗灰色シルト質土ブロック混入暗灰色砂層（ブロックは5cm前後）、2暗灰色シルト質土ブロック混入暗灰色砂層（ブロックは10cm前後で、砂層が斜方向の流理を形成する）、3暗灰色粘質土となっている。遺物はハの字状に広がる貼付高台を持つ塊片と、褐釉陶器片が出土している。

S K106 (Fig.11, PL. 5) 調査区中央部に位置する。楕円形を呈し、長径2.5m、短径1.6m、深さ0.2mの浅い土坑である。出土遺物は少なく、土師器の塊・皿片が数点出土している。S K127を切っており、土坑の中では新しい時期に属すると考えられる。

S K107 (Fig.11, PL. 5) 調査区中央部北寄りで検出した大型の土坑である。北側は擾乱で破壊されているが、長径は4.0mあったものと推察される。短径は3.2mで、中央部がさらに一段深くなる。土坑南側は間違って掘り過ぎたため、2段目の法量がはっきりしないが、長径2.1m、短径1.6m前後あったものと考えられる。土層堆積状況は、1灰茶褐色土（シルト質粘土ブロック含む）、2暗灰色粘質土（部分的に砂を含む）、3褐色砂層（一部に灰色粘土ブロック含む）となっている。遺構が大型で残りの良い割には出土遺物が少なく、土師器の塊・皿片が数点出土しているに過ぎない。

S K108 (Fig.11, PL. 6) 調査区東側で検出した楕円形の土坑である。長径1.9m、短径1.6mで、円形に近い形をとっており、底面は円形を呈している。断面は深く窪み0.8mを測る。遺物は少なく、土師器の塊・皿片が数点出土しているに過ぎない。

S K109 (Fig.11, PL. 6) S K108の西隣りに位置する小型の土坑である。規模があまりに小さく浅かったので土坑の範囲に含めるのに躊躇したが、柱穴状の掘り方ではないので、応土坑に含めて考えておきたい。かなり削平を受けて残りが悪いが、他の土坑と同じ様に灰褐色の砂質土が覆土になっていた。規模は、長径0.75m、短径0.65m、深さ0.1mである。遺物は土師器片が数点出土している。同様な規模の土坑は周囲に数基分布している。

S K110 (Fig.11, PL. 6) S K109の西隣りで検出された小型の土坑である。長径0.95m、短径0.85m、深さ0.5mを測る。規模の割には断面が深い。遺物は、土師器塊・皿片が数点出土している。

S K111 (Fig.11・12, PL. 7・44) 調査区北東部に位置する土坑である。平面形は角の取れた三角形状を呈し、断面は皿状に窪む。長径1.85m、短径1.75m、深さ0.25mを測る。土層堆積状況は、1淡黄褐色砂質土、2灰黑色粘質土（黒味が強い）、3淡黄褐色粘質土混入暗灰色粘質土、4黒灰色粘質土となっている。遺物は主に2・4層から出土し、土師器塊・皿・粗製の甕、滑石製の石鍋片、馬歯などがまとまって出土している。甕形の土師器は器高の低いものが多い。Fig.12の37は復元口径12.6cm、底径9.0cm、器高1.8cmの土師器甕である。淡灰褐色を呈

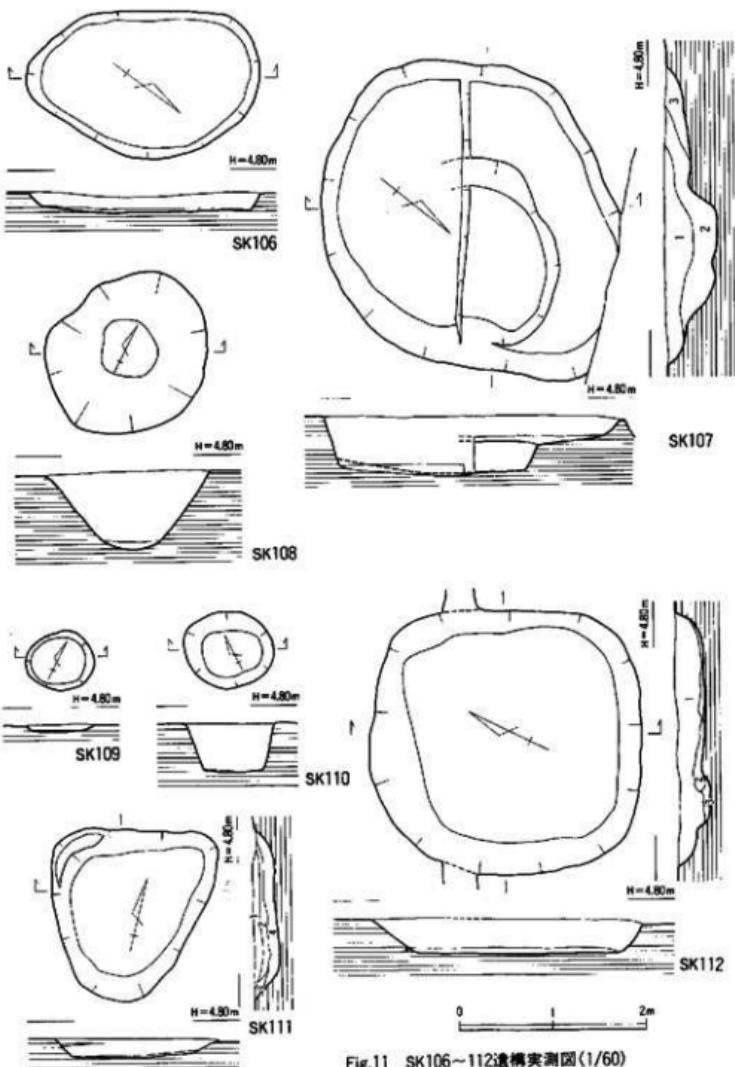


Fig.11 SK106~112造構実測図(1/60)

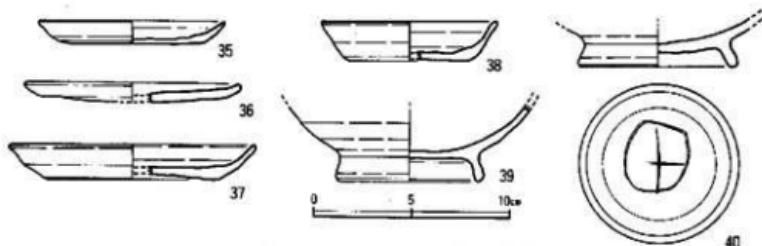


Fig.12 SK111-114出土遺物実測図(1/3)

し、胎土は精良であるが焼成は良くない。底面はヘラ切り放しで板目痕が付く。38は器高がやや高い土師器皿である。復元口径9.0cm、底径6.8cm、器高2.1cmである。淡灰褐色を呈し、37同様胎土は精良であるが、焼成は良くない。底面はヘラ切り放しで板目の圧痕が残る。39・40は高台付の土師器壺である。39は底径7.5cm、残高3.8cmで、胎土に2mm大の石英・長石粒を少量含む。内外面とも明るい淡灰褐色を呈する。焼成は良くなく内器面は磨滅している。40は、内面黒色の壺底部である。底径は8.2cmを測り、器高が2cm強残存している。胎土には1mm以下の石英・長石粒を含み、焼成はあまり良くない。外面は淡灰褐色を呈し、底面にヘラ描で丸に十字のヘラ記号が施される。SK111出土の遺物は10世紀後半代のものであろう。

SK112 (Fig.11・12, PL. 8・44) 調査区北側中央部寄りで出土した略方形の土坑である。南北幅2.9m、東西幅2.85mではほぼ正方形に近い。坑底は皿状に窪み、深さ0.3mを測る。土層堆積状況は、1灰褐色粘土ブロック混入灰色砂層（5cm前後の黒色土ブロックも混入、黒色土には薺灰を含む）、2暗灰色シルト質土・粘質土、3灰色砂層（黒色土ブロック含む）となっている。出土遺物は、土師器皿・环、内面黒色の土師器壺、粗製の甕片などがある。35は、口径9.5cm、底径7.4cm、器高1.3cmを測る土師器皿である。内外面とも明茶褐色を呈し、胎土は精良で焼成も良好である。底面はヘラ切り放しで、板目圧痕が付く、その他、底面が丸味を持つ环の破片が出土しており、SK112の時期は10世紀末から11世紀初めにかけてのものであろう。

SK113 (Fig.13, PL. 8) 調査区北側中央部に位置する土坑で、平面形はほぼ円形を呈すると考えられる。北側の一部が未調査区に延びているため南北の径が不明である。東西は2.45mで、深さは0.45mを測る。断面は皿状に緩やかに窪む。土層堆積状況は単純で2層にしか区分できない。1灰茶褐色粘土ブロック混入灰色砂層、2暗灰色粘質土（部分的に灰色砂層が混じる）となっている。出土遺物は殆ど確認することができなかった。

SK114 (Fig.12・13, PL 9・44)

調査区北側中央寄りで検出した小型の浅い土坑である。平面形は略方形を呈し、断面は皿状に陥る。長径1.8m、短径1.3m、深さ0.2mを測る。遺構南側はSK130によって一部切られている。出土物は土師器皿・环などが出土しているが、数も少なく小さな破片となっている。Fig.12の36は土師器皿で、復元口径11.0cm、底径9.1cm、器高1.0cmを測る。器色は灰褐色を呈し、胎土は精良で焼成良好である。底部はヘラ切り放しで、板目の圧痕が付く。一部には指おさえも施されている。

SK116 (Fig.13, PL 9) 調査区のほぼ中央部に位置する楕円形の上坑である。長径1.9m、短径1.5m、深さ0.5mを測る。底面はほぼ円形を呈し、径1mである。土層堆積状況は、1灰褐色粘土ブロック混入灰色砂質上、2灰褐色粘質土、3暗灰色粘質土、4灰褐色砂層、5灰色砂層、6暗灰色砂層、7暗灰色シルト質土となっている。土坑の中央下部に暗灰色の粘質土が堆積する状況は他の土坑にも多い。出土物は少なく、土師器の皿・环・塊片が數点あるに過ぎない。

SK119 (Fig.13, PL.10) 調査区南端部で検出された角の丸い長方形を呈する土坑である。長辺2.6m、短辺1.2mで、断面は皿状に浅く陥り、0.2mを測る。この土坑の掘り込まれた基礎層は砂層になっており、覆土は灰色の粘土ブロックを含む砂質土である。出土物は土師器の皿や环片が数点出土しているに過ぎない。

SK120 (Fig.14, PL.10) 調査区南側で出土した円形に近い楕円形の土坑である。

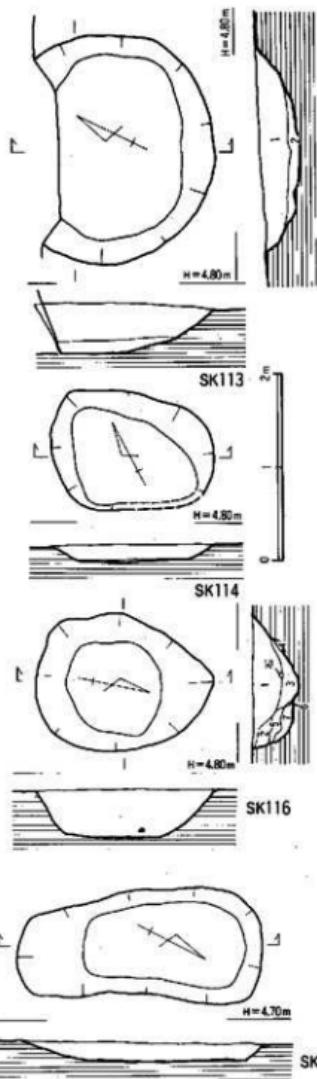


Fig.13 SK113・114・116・119・120実測図(1/50)

S K119のすぐ北側に位置する。規模は中型で、長径3.1m、短径2.35m、深さ0.6mである。断面は緩やかに窄りながら途中で段を有し、さらに中央部が深くなっている。土層堆積状況は、1灰色粘土ブロック混入砂質土（粘土ブロックは10cm前後）、2灰色粘土ブロック混入砂質土（ややブロックの混入具合が少ない。1'も2と同じ）、3暗灰色粘土、4灰色～褐色粗砂層（黒灰色粘土ブロック含む）、5黒灰色粘土ブロックとなっている。出土遺物は少ないが、黒色土器の塊片が出土している。

S K121 (Fig.14、PL.11・50) S K120の北西側に位置し、S K122を切っている。平面形は角の丸い長方形状を呈し、長軸方向は1.8m、短軸方向は1.65mである。坑底までの深さは0.3m前後である。土層堆積状況は、1灰褐色砂質土、2暗灰色粘土、3暗灰色砂層（暗灰色粘土が薄層理状に混入する）、4灰色砂層となっている。土層の立ち上りは東側では判然としなかったので、S K121は東側にもう少し延びる可能性がある。出土遺物は少量で、土師器の坏片、白磁片などが出土している。また、土坑立ち上りの部分で曲物の底板が出土している。杉板製と考えられ、中央部に穿孔が認められる。

S K122 (Fig.14、PL.12) S K121に切られる楕円形の土坑である。長径2.6m、短径1.9mで、断面は皿状に窄み、深さ0.35mを測る。上層堆積状況は単純で、1灰褐色砂質土、2暗灰色粘土、3暗灰色砂層（暗灰色粘土のブロックが層理をなして混入する）となっている。遺物は土師器片が少量出土しているに過ぎない。

S K123 (Fig.14、PL.12) 調査区西側寄りで検出した略長方形を呈する土坑である。S K122のすぐ北側に位置する。長軸方向2.3m、短軸方向1.6m、深さ0.3mを測る。土層堆積状況は、1灰褐色砂質土、2暗灰色粘土、3暗灰色シルト、4暗灰色砂層、5灰色～褐色砂層（水田面上を覆う砂層を掘りすぎたものか）となっている。遺物は、須恵器甕・坏片、白磁片などが少量出土している。

S K124 (Fig.14、PL.13) 調査区西側中央寄りに位置する小型の土坑である。略円形を呈し、径は1.1mである。断面は皿状に窄み、深さ0.25mを測る。土層堆積状況は、1暗灰色土（ややシルト質）、2黄白色砂層、3灰褐色砂層、4淡黄灰色砂層である。出土遺物は非常に少なく土師器片が数点出土しているに過ぎない。

S K125 (Fig.14、PL.13) 調査区西側中央部に位置する小窓の土坑である。西側半分を擾乱によって削り取られている。略円形を呈するとみられ、径は1.1m、断面は皿状に窄み0.3mを測る。上層堆積は、1暗灰色粘土質土、2暗灰色シルト質土、3黒灰色砂質土となっている。小型で、半分は破壊されていたので出土遺物はみられなかった。

S K126 (Fig.14、PL.14) 調査区中央部で検出した土坑で、S D117を切って位置している。略方形を呈し、長軸方向2.55m、短軸方向2.3mを測る。断面は皿状に窄むが、東側から西側に向って深くなっている。最も深い所は0.35mである。土層堆積状況は、1暗灰色粘土ブロック

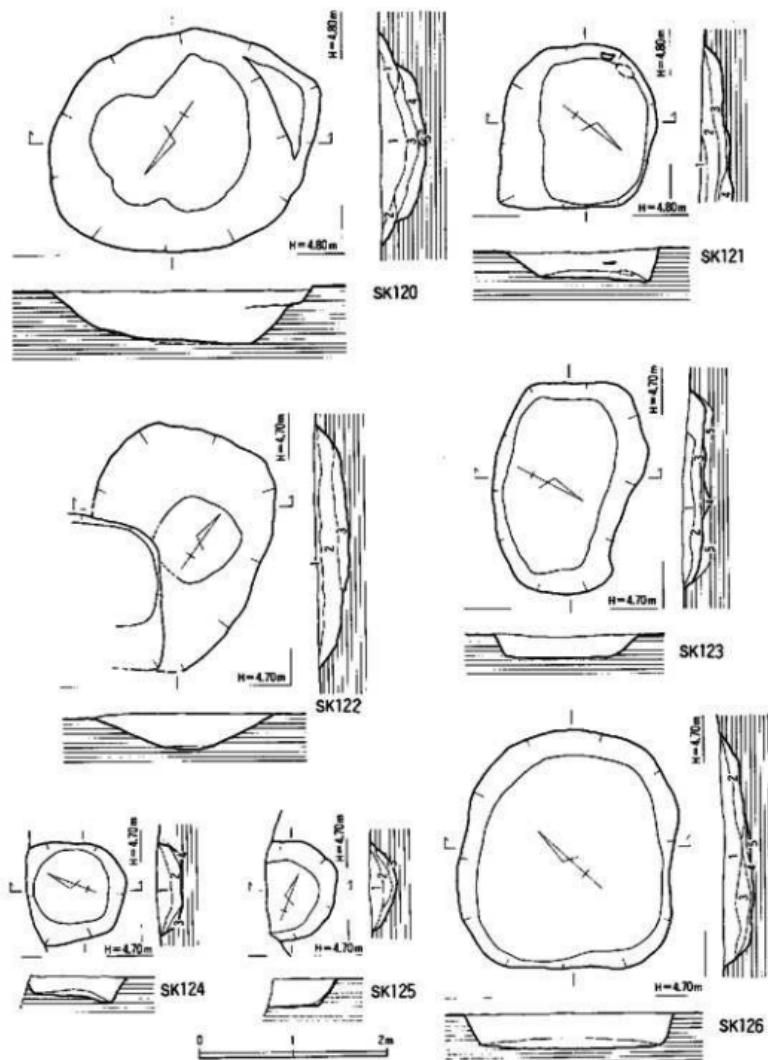


Fig.14 SK120~126遺構実測図(1/60)

ク混入淡灰褐色砂質土、2暗灰色砂質土、3暗灰色粘質土（やや砂質気味）、4灰黑色粘質土、5灰黑色砂層となっている。出土遺物は、須恵器甕、口縁内面に段を持つ輸入陶器の捏鉢、土師器皿・坏片などである。11世紀代に属するものであろう。

S K 127 (Fig.15, PL.15) 調査区中央部に位置する楕円形の土坑である。S K 128を切りS K 106に切られている。長径2.8m、短径1.85mで、断面は皿状に窪み東側が深くなる。最も深い所で0.4mを測る。上層は単純で、上下2層に分かれる。1暗灰色粘土ブロック混入暗灰色砂層（粘土ブロックは10cm前後）2暗灰色粘質土（やや砂質っぽく、暗灰色粘土ブロックを含む）である。遺物はロハゲの白磁皿、須恵器の甕、土師器の皿や坏片などが出土している。遺物は小さな破片なので時期を決め難いが、白磁から考えると14世紀代まで下るか。

S K 128 (Fig.15, PL.15) S K 127に切られて西側に位置する楕円形の土坑である。西側に広がるS D 117を切っており、これよりも新しい時期のものである。長径2.9m、推定短径は2m強で、深さは0.45mである。底面は皿状に窪み、南側は2段になっている。土層堆積状況は、1暗灰色砂質土（暗灰色粘土ブロック含む）2灰色粗砂層、3灰黑色粘質土となっている。遺物は、土師器の皿・坏・内面黒色の焼片などが少量出土している。

S K 129 (Fig.15, PL.16) 調査区中央部北寄りに位置し、S K 107の西隣りにあたる。平面形は略方形を呈し、北側が擾乱で破壊されている。東西幅2.5m、南北幅は2.2mまで確認できる。中央部は2段掘りになっており、東西1.7m、南北1.9mを測ることができる。底面までの深さは0.6mである。土層堆積状況は、1暗灰色粘土ブロック混入灰褐色砂層、2暗灰色粘質土、3暗灰色粘土ブロック混入灰色砂層、4暗灰色粘質土（砂粒混入）となっている。遺物は、混入した須恵器の环身片、土師器の皿・坏片などが少量出土している。

S K 130 (Fig.15・16, PL.16・45・48) S K 129の北側に位置する小型の土坑である。南側半分は擾乱で破壊されている。円形を呈するとみられ、径1.65mを測る。断面は皿状に窪み0.25m前後である。土層堆積状況は1灰色砂質土、2暗灰色粘質土（土師皿を含む）、3灰色砂質土（やや黒っぽい）、4暗灰色粘質土（土師皿含む）となっている。遺物は土師器皿・坏・塊がまとまって出土している。Fig.16、41～46は土師器皿である。口径9.0～10.5cm、器高1.0～1.5cmである。底面はヘラ切りで、板目压痕の残るものが多い。灰褐色から淡灰褐色を呈し、胎土は精良で焼成良好である。41だけは焼成が良くない。47～49は坏である。47は復元口径13.2cm、底径9.4cm、器高3.4cmを測る。灰褐色を呈し、胎土には赤色粒子を含み、精良である。焼成は良くない。外底面に指おさえの跡が残る。48は口径14cm、器高3.7cmで灰褐色を呈し、胎土焼成とともに47に類似している。外底部にはヘラ切りの後指おさえの圧痕が残る。49は口径14.9cm、器高4.2cm、底径10.0cmを測る。底部は粘土紐巻き上げで作られ、ナデ調整が施されている。色調は淡灰褐色を呈し、内面にはススが付着する。胎土は精良で、焼成は堅硬である。50は内面黒色の高台付土師器塊である。復元口径14.4cm、底径7.7cm、器高5.4cmを測る。外表面は明るい灰褐

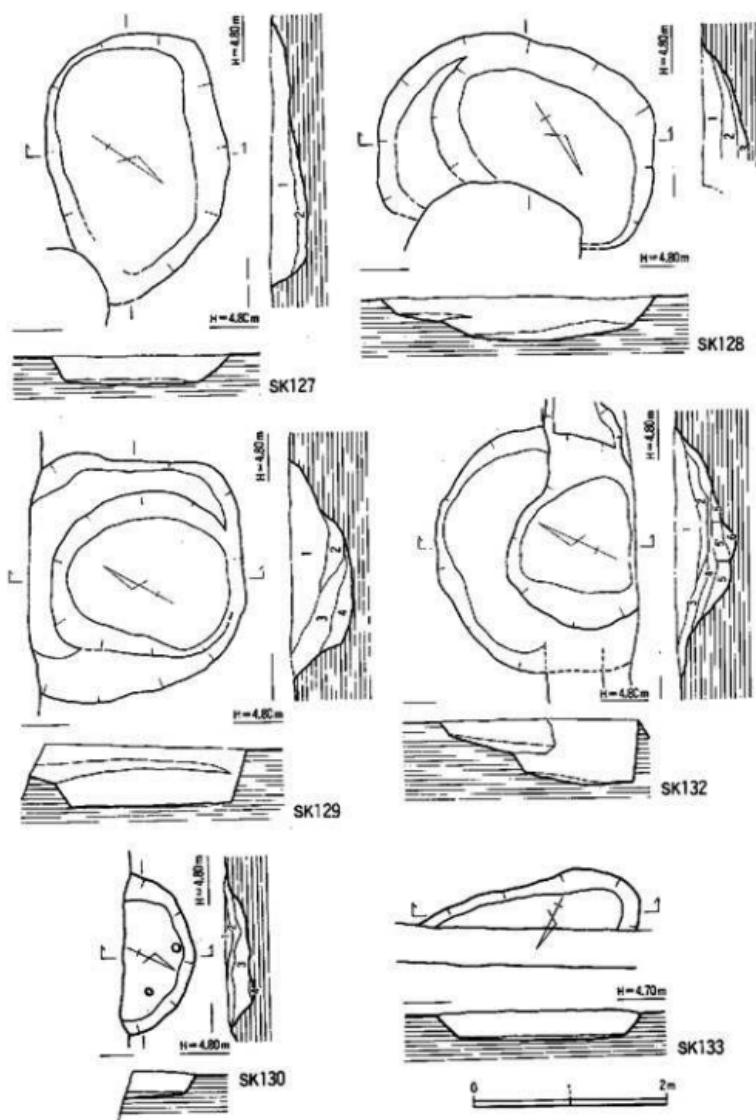


Fig.15 SK127~130·132·133造構実測図(1/60)

1 土坑

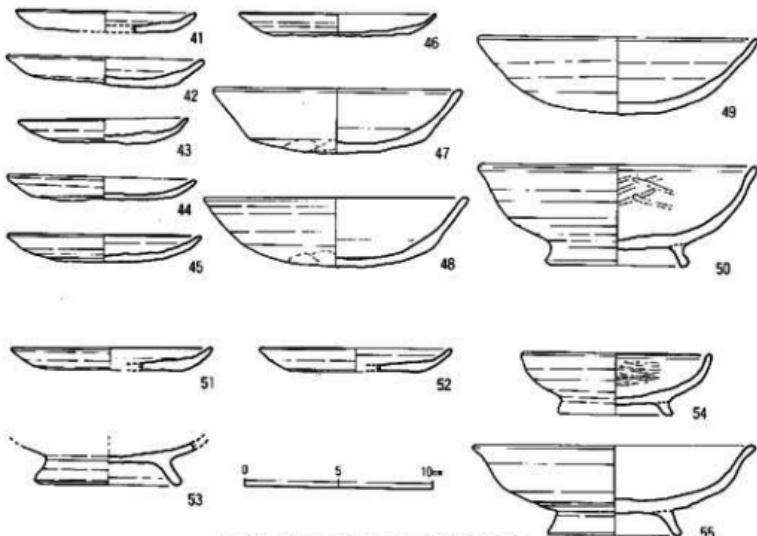


Fig.16 SK130~133出土遺物実測図 (1/3)

色を呈し、内面は黒灰色である。内面にはヘラミガキ痕が残る。胎土は精良であるが焼成は良くない。その他、滑石製の石鍋片1点と砥石が2点出土している。SK130は出土遺物から10世紀末から11世紀前半にかけての所産であると考えられる。

SK132 (Fig.15・16, PL.45, 49) 調査区中央部北西寄りに位置する。南側部分は擾乱溝で破壊されており深い部分しか残っていない。平面形はほぼ円形を呈し、2段掘りになっている。上径は2.5m、2段目の径は1.5m前後である。深さは0.6m以上ある。土層堆積状況は、1暗灰茶褐色砂質土、2暗灰色粘質土、3灰色～褐色粗砂層、4灰黑色粘質土、5灰黑色砂質土、5'黒色土、6灰黑色砂層となっている。5'の黒色土は幅40cmの灰混りの層で、層が縦に区分できることから、すぐ南に位置するSE130と同様な井戸の井筒部分に堆積した層ではないかと考えられる。したがって、SK132は土坑として扱っているが井戸の可能性が高い。遺物は内面黒色の土師器塊、灰褐色を呈する土師器の环・皿片・滑石製の石鍋片2点などが出土している。55は北半部から出土した高台付の土師器塊である。復元口径15cm、底径7cm、器高4.8cmを測る。色調は灰白色を呈し、胎土は精良であるが焼成はあまり良くない。体部の下方と高台接合部は沈線状になっている。

SK133 (Fig.15, PL.45) SK132の北側に位置する長楕円形の土坑である。北側部分は

機乱によって破壊されているので全体の様子は分からぬ。残長2.3m、深さ0.3mである。遺物は土師器の壇や壺などが出土している。54は小型の瓦器高台付壺である。口径10.1cm、底径6.1cm、器高5.3cmを測り、外面灰褐色、内面黒褐色を呈する。胎土、焼成とも良好で、内外面にヘラミガキ及び横ナテ調整が施される。

S K 134 (Fig. 17, PL. 17) 調査区北側中央部で検出した円形に近い楕円形の土坑である。長径2.6m、短径2.4mで、断面は皿状に隆み、深さ0.35mである。土層堆積状況は、1灰茶褐色粘土ブロック混入灰色砂層、2灰色砂層、3暗灰色粘質土（両端部は粘土ブロックを含み、中央部は薄い砂層が層理を成し、カーボンが混入する）となっている。遺物の出土量は少なく、土師器の壺片が数点出土しているに過ぎない。

S K 135 (Fig. 17) 調査区北端部に位置し、南側はS K 134に切られ、北側は未調査区に延びているため全体の様子が分からぬ。残存している東西幅は2.1m、深さ0.4mである。遺物は土師器の皿、甕、内面黒色の壺などが出土している。また、上層及び下層に灰の混じった層があり、それぞれの層から炭化したコメが出土している。

S K 136 (Fig. 17) 調査区北端部に位置し、S K 135に切られる。北側半分は未調査区に延びており全体の様子が分からぬ。残存幅1.5m、深さは0.4mである。遺物は全く出土していない。

S K 137 (Fig. 17, PL. 18) 調査区北側西寄りで出土した略方形の土坑である。

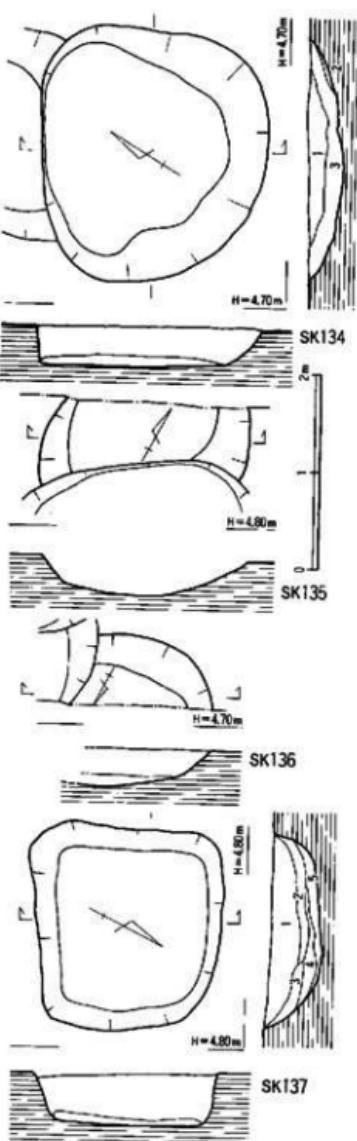


Fig. 17 SK134-137実測図(1/60)

I 土坑

S K132の南西側に位置する。東西2.1m、南北1.9mで、深さは0.55mを測る。断面は皿状に窪み、土層堆積状況は、1灰茶褐色土（粘土ブロック含む）、2灰黑色粘質土、3褐色砂層、4灰黑色粘質土、5灰色砂層となっている。遺構の遺存状態は良好であったが、遺物の出土量は少なかった。土師器の甕や塊片などが出土しているに過ぎない。

S K138 (Fig.18) 調査区北側西寄りに位置する。長楕円形で、長径2.8m、短径0.95m、深さは最も深い所で0.2mである。北側部分は擾乱によって一部壊されている。出土遺物は検出することができなかった。

S K139 (Fig.18) 調査区西侧南寄りに位置する。遺存状態は悪い。残存長1.25m、深さ0.35mである。須恵器の环の口縁部が出土している。混入したものであろう。

S K140 (Fig.18) S K139に切られ、さらに擾乱で破壊されているので全体の様子は分からぬ。小型の土坑の一部であろう。覆土から土師器の破片が数点出土している。

S K142 (Fig.18, PL.18) 調査区西侧中央寄りに位置する大型の土坑である。東側は擾乱で壊されているが、長径4.3m、短径は2m以上あると推察される。断面は段を有し乍ら皿状に窪み、中央部が最も深くなる。最深部は確認面から-0.8mである。坑底には足跡状の窪みがあり、粗砂が詰まっている。土層堆積状況は、1灰色粘土ブロック混入淡黄色砂質土、2灰色粘土ブロック混入灰色砂質土、3暗灰色・黒色粘土ブロック混入暗灰色土、4暗灰色粘土ブロック混入暗灰色砂質土、5黒色粘土ブロック混入暗灰色土、6暗灰色砂質土、7暗灰色砂層（黒色粘土ブロック混入）となっている。遺物は少なく、土師器皿・塊片・須恵器片などが出土しているに過ぎない。

S K143 (Fig.18, PL.19) S K142のすぐ西側に位置する。円形に近い楕円形を呈し、長径1.85m、短径1.7m、深さ0.6mを測る。断面は逆台形状で、坑底に足跡状の窪みが観察される。上層堆積状況は、1淡灰褐色砂質土、2暗灰色粘質土（ややシルト質）、3黒灰色粘土ブロック混入暗灰色砂層（ブロックは3~5cm程度で細かい）となっている。遺物は土師器片が数点出土している程度で少ない。

S K144 (Fig.18) S K143のすぐ北側に位置する。円形に近い楕円形の浅い土坑である。長径1.7m、短径1.5m、深さ0.1m弱である。出土遺物はみられなかった。

S K145 (Fig.18) S K143の東隣りで検出した小型の土坑である。長径1.2m、短径1m、深さ0.2m弱である。遺物は土師器片が少量出土している。

S K146 (Fig.18, PL.20) 調査区西端部中央で検出した土坑である。西側半分は未調査区へ延びており全体の様子が分からぬ。残存長径2.2m、深さ0.7mである。坑底には足跡状の窪みが観察される。土層堆積は、1表土、2淡褐色砂質土（下半部は10cm前後の暗灰色粘土ブロックから成る）、3暗灰色粘質土、4褐色砂層、5暗灰色粘質土、6暗灰色砂層となっている。遺物は全く出土しなかった。

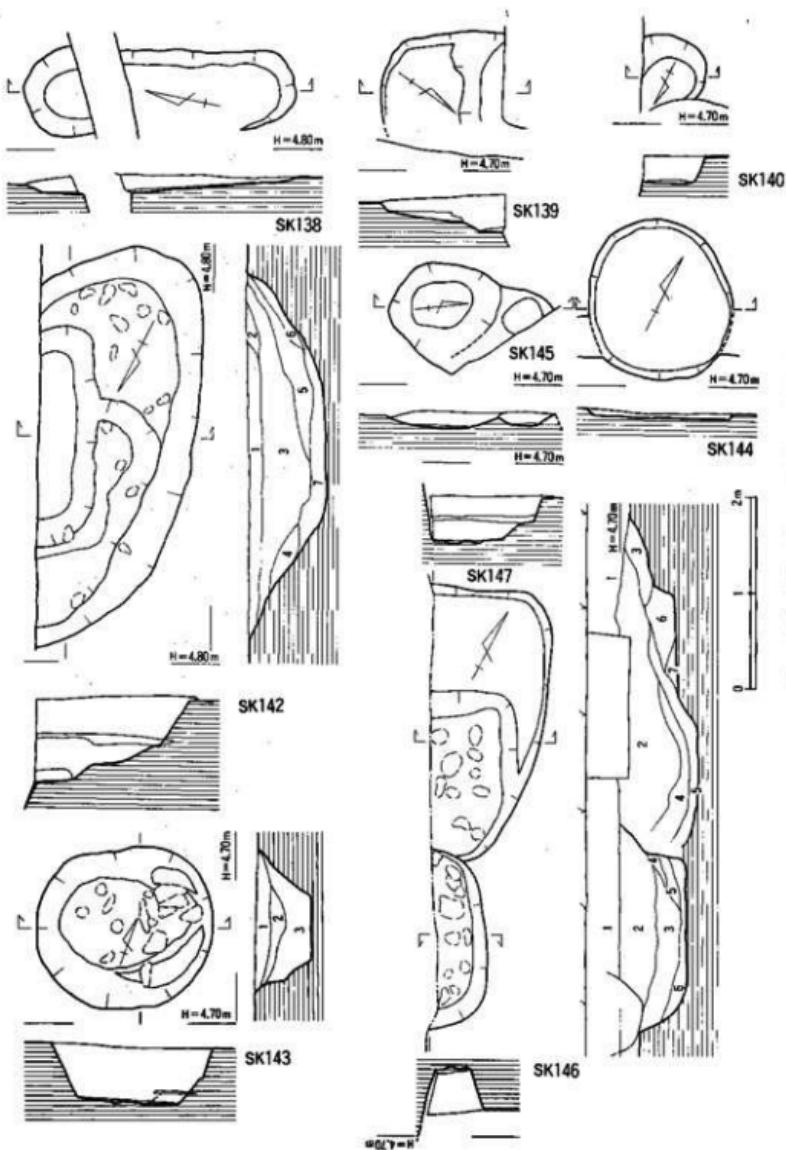


Fig. 18 SK138~140・142~147 連縫実測図(1/60)

1 土坑

S K147 (Fig.18, PL.20) 調査区西端部に位置し、南側はS K146に切られている。西側は未調査区へ延びており詳細は分からぬ。残長3m以上、深さ0.8mを測る。坑底は南側に向かうに従って段状に深くなっている。最深部には足跡状の窪みが検出できる。土層堆積状況は、1表土、2淡灰褐色砂質土（下部に暗灰色粘土ブロック含む）、3暗灰色粘土ブロック混入褐色砂層、4暗灰色粘質土、5暗灰色砂層、6暗灰色粘質土、7灰色砂層となっている。出土遺物は少なく、土師器片が数点出土しているに過ぎない。

S K148 (Fig.19, PL.21) 調査区西側に位置し、S K147の東側にあたる。擾乱によって東半分は破壊されているが略方形を呈していたものと推察される。南北3.0m、深さ0.4mを測る。南側はさらに別の土坑が存在していたが、調査時には同一造構と考えて堀り下げてしまった。坑底には足跡状の窪みが多く観察される。土層堆積状況は、1黒灰色砂質土ブロック混入暗灰色弱粘質土、2暗灰色細砂層、3灰黒色粘土ブロック混入灰色砂層、4暗灰色砂質土、5黄白色粗砂層、6灰色細砂層となっている。遺物は土師器片が数点出土している。その中でメンコ状に丸く打ち欠いて加工したものがある。

S K149 (Fig.19, PL.22) 調査区西側に位置し、S K147の北側にあたる。楕円形を呈し、北側はS K150に切られている。長径2.8m、深さ0.4mである。坑底には足跡状の窪みが存在する。土層堆積は、1暗灰色粘土ブロック混入褐色砂層、2暗灰色粘質土（ブロックから成り、間に砂が詰まる）、3暗灰色粘質土（ブロックから成り、間に砂が詰まる）、4暗灰色粘質土（やや墨味が強く、灰色の砂が混入する。土質はブロック状）、5黒灰色粘質土（黒灰色粘土のブロックから成り、細かい砂が間に詰まる）、6暗灰色粘土ブロック混入灰色砂層（ブロックは2~3cmと細かい）となっている。遺物は須恵器片、黒色土師器塊、瓦質土器片などが少量出土している。

S K150 (Fig.19) S K149を切ってすぐ北側に位置する。西側半分は未調査区に延びており全体の形状は判然としないが、略方形を呈するものと推察される。南北長2.1m、深さ0.3mである。坑底には足跡状の窪みが観察される。遺物は全く出土していない。

S K151 (Fig.19, PL.23) 調査区西側のやや北寄りに位置する略長方形の土坑である。東側は擾乱によって破壊されているので全長は分からぬが、残存長は1.9mである。幅は1.8m、深さ1.1mである。土坑の中では最も深いものである。土層堆積状況は、1暗灰色土（粘土ブロックから成る。部分的に黒色の粘土ブロックが混入する。砂も混入する）、2灰色砂層、3暗灰色粘土ブロック混入灰色砂層、3'粘土ブロックを含まない灰色砂層となっている。遺物は土師器片が少量出土している。

S K152 (Fig.19, PL.24) 調査区西側北寄りに位置する。一部擾乱によって破壊されているが、残存状態の良い土坑である。長径2.7m、短径2.3m、深さ0.55mを測る。土層堆積状況は、1暗灰色砂質土（10~20cm大の粘土ブロックから成る）、2暗灰色砂質土ブロック混入暗灰

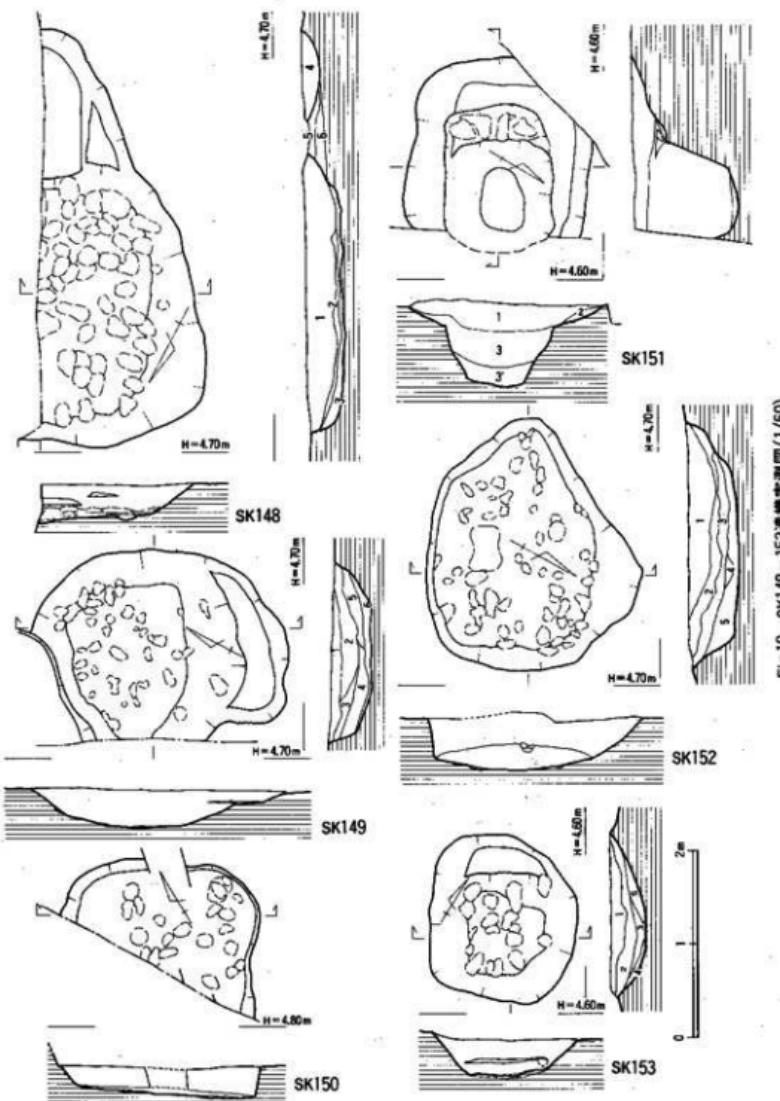


Fig.19 SK148~153勘探剖面图(1/60)

色砂層、3灰黒色粘土ブロック混入細砂層、4灰黒色粘土、5暗灰色粘土ブロック混入暗灰色砂質土（粘土ブロックが細かい。5cm前後）となっている。遺物は殆ど出土していないが、黒曜石の破片が1片だけ混入した状態で出土している。

S K 153 (Fig.19, PL.25) S K 152の北側に位置する略長方形の土坑である。南北1.75m、東西1.55m、深さ0.35mを測る。断面は皿状に窪み、坑底には足跡状の窪みがみられる。土層堆積は、1暗灰色粘土ブロック混入暗灰色砂質土、2黒灰色粘質土、3灰黒色粘質土、4暗灰色砂層、5灰色砂層となっている。遺物は上師器片が数点出土しているのみである。

S K 154 (Fig.20・22, PL.45) 調査区東側南寄りに位置する略方形の土坑である。南北2m、東西2.1m、深さ0.2mである。土層堆積状況は、1灰褐色砂質土、2暗灰色粘質土（砂粒を含む）となっている。遺物は、上師器皿・壺、須恵器の腹片などが出土している。Fig.22の56は土師器皿である。復元口径10cm、底径6.2cm、器高1.6cmを測る。灰褐色を呈し、胎土は精良、焼成は良好である。底部はヘラ切り放して、板目の圧痕が付く。口縁部内面にはカーボンが付着しており灯明皿に使用された事が窺える。

S K 156 (Fig.20) 調査区西側北寄りで発見された。S K 152に切られており、擾乱によつても破壊されているので全体の様子が分からず。幅1.7m、深さ0.3mである。出土遺物は少なく、土師器片が少量出土しているのみである。

S K 157 (Fig.20・22, PL.45) 調査区中央部やや北寄りに位置する楕円形の土坑である。長径2.9m、短径2.1mで中央部は段を有して深くなり、径1.7~1.8mを測る。確認面からの最深部は0.3mである。土層堆積状況は、1灰褐色砂質土（灰色粘土ブロックが風化したもの含む）、2暗灰色粘質土となっている。遺物は土師器の皿・壺、黒色土師器壠などがある。57は土師器壠の底部である。復元底径9.5cmで、底面はヘラ切りである。淡灰褐色を呈し、焼成は良くない。胎土は精良である。

S K 158 (Fig.20・22, PL.26・45) 調査区中央部に位置する大型楕円形の土坑である。長径4.2m、短径2.9mで、断面は皿状に窪み0.5mを測る。土層堆積状況は、1暗灰色粘土ブロック混入褐色粗砂層（ブロックは5cm前後）、2暗灰色泥質砂層となっている。遺物は、土師器皿・壺、粗製の甕、黑色土師器、瓦質上器、須恵器壺片などがある。58は内面黒色の土師器壠でS K 158下層から出土した破片とS K 159から出土した破片が接合したものである。復元口径14.6cm、底径8.6cm、器高6.5cmを測る。外面は明るい茶褐色、内面は黒灰色を呈し胎土は精良で焼成も良い。内面にヘラミガキが施される。

S K 159 (Fig.20) S K 158のすぐ南側に位置するやや楕円形の土坑である。南側はS D101と切り合いになり、かつ試掘溝がはいっていたので造構ラインを確認することができなかつた。長径3.3m、推定短径2mで、断面は皿状に浅く窪み0.15mを測る。遺物は、土師器の壺・皿片、同安窯系の青磁碗片などが出土している。

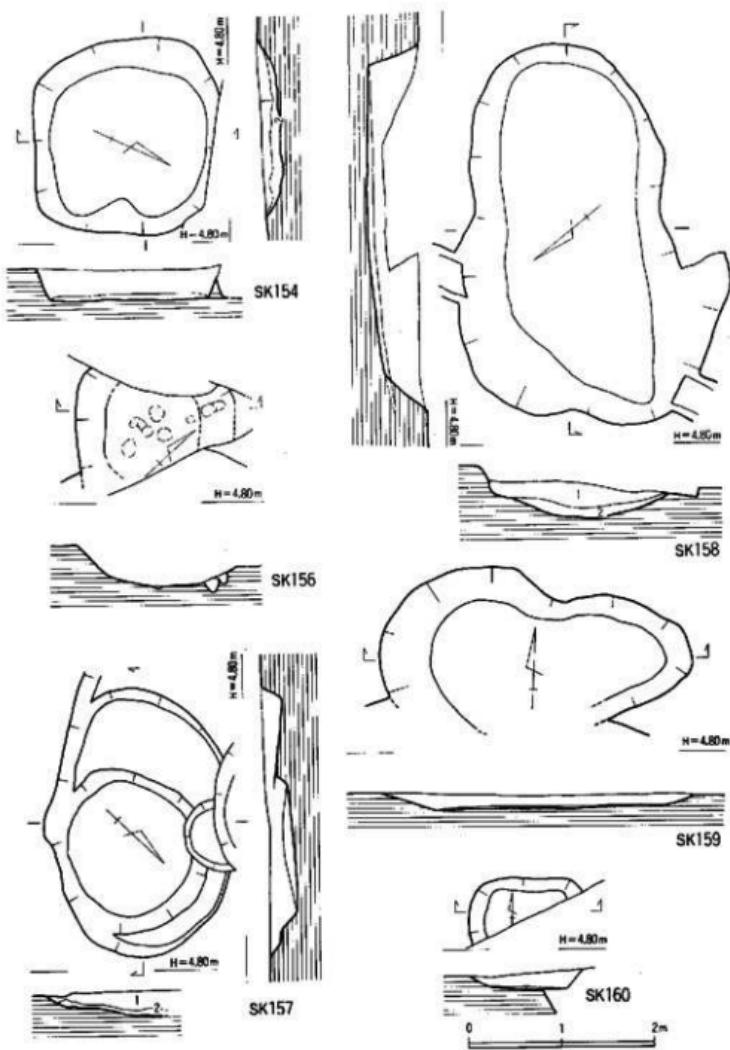


Fig.20 SK154~156~160造構実測図(1/60)

S K 160 (Fig.20) 調査区北側中央寄りに位置する小型の土坑である。南側は擾乱によつて破壊されているので全形は描めないが、略方形を呈するものと推察される。残存長1.2m、深さは0.2mである。遺物は土師器の壺・塊片が少量出土しているに過ぎない。

S K 162 (Fig.21・27) 調査区北側で検出した楕円形状を呈する土坑である。長径2.9m、短径2.4m、深さ0.55mを測る。断面は皿状に窪み、比較的の残りが良い。土層堆積状況は、1灰褐色粘土ブロック混入灰色砂層(10cm前後の黒色灰ブロック含む)、2暗灰色粘質土(砂層を少し含む)、3暗灰色砂層となっている。遺物の出土量は少なく、土師器の高台付塊片が出土しているに過ぎない。

S K 163 (Fig.21) 調査区北東隅、S K 111の北側に位置する。第I面調査終了後、さらに掘り下げる段階で確認したので、規模が少し小さくなっている。長径1.6m、短径1.3m、深さ0.4mである。東側の一部は擾乱によって破壊されている。遺物は、土師器皿・壺・塊、内面黒色の土師器塊、粗製の甕などがある。

S K 164 (Fig.21・22, PL.28・45) 調査区北東部に位置する小型の土坑である。長径0.9m、短径0.75mの楕円形で、断面は皿状に浅く窪み0.1mを測る。遺物は土師器皿・塊などが出土している。Fig.22-51は土師器皿である。口径10.8cm、底径7.2cm、器高1.9cmを測り、胎土には1~3mm大の石英・長石粒・金雲母などの粒子を含む。内外面とも明るい灰褐色を呈し、焼成は良くない。底面はヘラ切り放しの後、板目圧痕が付く。

S K 165 (Fig.21, PL.28) S K 164のすぐ西側で検出した土坑で、S K 164に切られている。また、南側は擾乱で破壊されているので全体の様子は分からぬ。残存長2.1m、深さ0.1mである。遺物は、土師器皿・塊、内面黒色の土師器塊などが出土している。

S K 166 (Fig.21・22, PL.29・45) S D 115の溝底で確認した小型の土坑である。径1.2mの円形を呈し、深さは0.5mを測る。埋土は灰を多く含む黒色土で、ヒエなどの植物種子が出土している。遺物は、土師器皿・粗製の甕片などが出土している。Fig.22-60は土師器皿である。口径10.6cm、底径5.6cm、器高1.4cmを測り、色調は灰褐色を呈する。胎土は精良で、焼成も良好である。底面にはヘラ切りの後、板目圧痕が付く。

S K 167 (Fig.21, PL.30) S K 107の東隣りで検出した小型の土坑である。略長方形を呈し、断面は皿状に窪む。南北1.25m、東西1.05m、深さ0.3mを測る。土層堆積は、1暗灰色シルト質土ブロック混入黒灰色砂質土、2暗灰色砂質土となっている。遺物は極端に少なく、土師器片が数点出土しているに過ぎない。

S K 168 (Fig.21) 調査区東側やや北寄りで検出した浅い土坑である。楕円形を呈し、長径1.15m、短径0.9m、深さ0.1m弱である。遺物は、越州窯青磁碗片、土師器壺片、須恵器甕片などが出土している。

S K 170 (Fig.21, PL.31) 調査区東端部中央に位置する略円形の土坑である。南北2.0m、

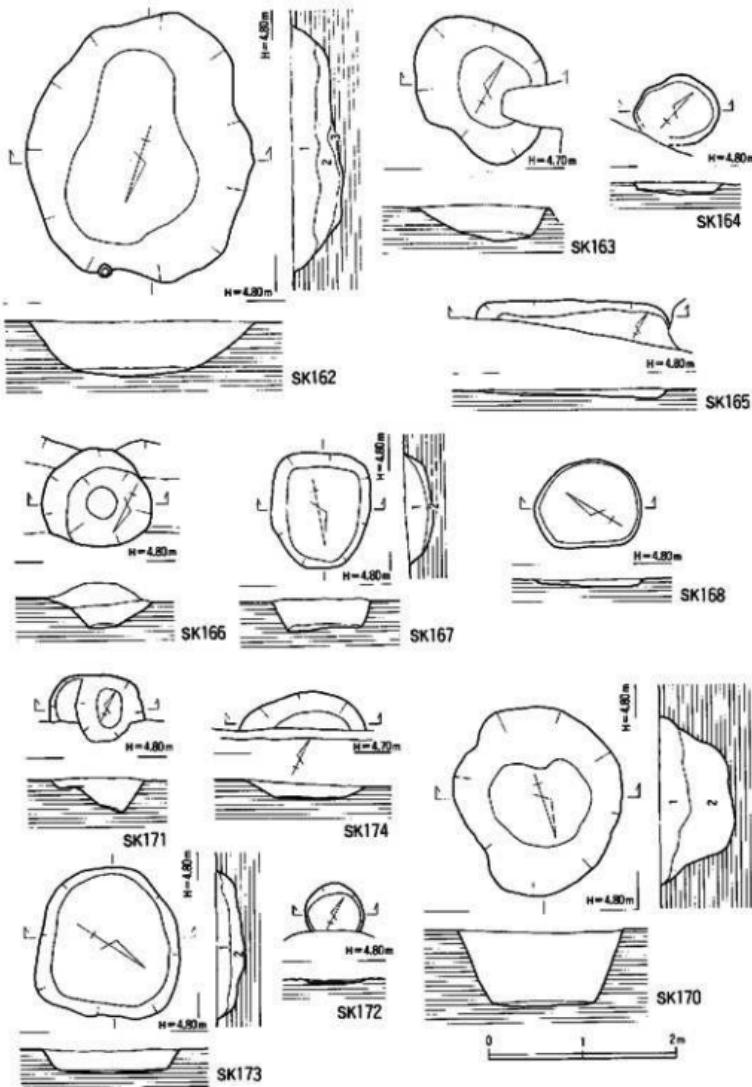


Fig.21 SK162-168-170-174遺構実測図(1/60)

1 土坑

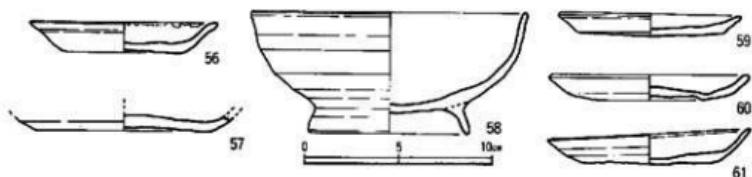


Fig.22 SK154+157~159+164+166+174出土遺物実測図(1/3)

東西1.8m、深さ0.8mを測る。土層堆積は大きく2層に分かれている。1灰色～灰茶褐色粘土ブロック混入灰色シルト質土（ブロックは10cm前後）、2暗灰色粘土ブロック堆積土（ブロックは10cm前後で、ブロック間には砂が少し詰まる）である。1・2とも粘土ブロックから成っていて、この粘土ブロックは基盤土の再堆積土と考えられる。掘り返された土が早い段階で埋まつたか、あるいは埋められたものであろう。出土遺物は土師器皿片、内面黒色の土師壺、瓦質土器片などがある。

S K171 (Fig.21) S K102の北側に位置する小型の土坑である。柱穴程度の大きさであるが、他に同様な穴が広がらないので上坑の範囲に含めておきたい。東西1m、南北0.7mで中央部は2段掘りになって深さ0.35mを測る。出土遺物は、土師器皿・壺・甕、内面黒色の土師壺、瓦質土器片などがある。

S K172 (Fig.21) 調査区北側西寄りに位置する小型の土坑である。S K132によって南側の一部が切られている。遺構の残りは悪く、径0.6m、深さは5cm未満である。覆土は灰黒色の灰を多く含む土壤で、水洗によって炭化米が出土している。遺物には土師器環・粗製の甕、須恵器の甕片などがある。

S K173 (Fig.21) 調査区南端部東寄りに位置する略方形の土坑である。東西1.6m、南北1.5mを測り、断面は皿状に窪む。深さ0.3mである。土層堆積状況は、1淡灰褐色砂質土（暗灰色粘土ブロック間に褐色砂が詰まる）、2暗灰色砂質土（暗灰色粘土ブロックを含む）となっている。遺物は全く出土しなかった。

S K174 (Fig.21・22, PL.45) 調査区南端部中央寄りで検出した土坑である。略円形を呈すると考えられるが、半分以上は南側の未調査区に延びており、全体の形状は描めない。出土遺物には土師器皿がある。Fig.22-59は口径9.7cm、底径7.8cm、器高1.2cmを測る土師器皿である。内外面とも淡灰褐色を呈し、胎土、焼成とも良好である。底面はヘラ切り放し後、板目圧痕が付く。

S K175 (Fig.5, PL.29) 調査区南端部中央寄りに位置する横円形の土坑である。長径2.3m、短径2.0m、深さ0.7mを測る。中央部の窪んだ砾石が1点出土している。

2 井戸

SE 118 (Fig. 23, PL. 32) 調査区南端部に位置する。略円形を呈し、南側の一部は未調査区に延びる。径2.7m、深さ1.1mを測る。断面は1段折れて急に深くなる。平面形は他の土坑と変わらないが、断面が深く湧水も激しいことから、井戸と判断した。埋土は暗灰色粘土ブロック混入の暗灰色砂質土である。単純な堆積状況を示していく3層位まで区分できたが、湧水のため土層が崩落して実測図を作成できなかった。遺物は全く検出していない。

SE 131 (Fig. 16・23, PL. 32・45) 調査区中央部やや北寄りで検出した。北側の一部は擾乱によって破壊されている。平面形は略円形を呈し、径2.3m前後を測る。断面は皿状に窪み、深さ0.4mである。中心部に近い位置に井筒を有する。土層堆積状況は、1 淡灰褐色砂質土、2 黒灰色灰層、3 暗灰色砂質土、4 灰黒色灰層、5 黑灰色砂質土、6 黑灰色粘質土、7 暗灰色砂層、8 暗灰色砂質土、9 灰黒色粘質土、10 黑色粘質土、11 灰色砂層となっている。井筒は径45cm、高さ12~13cmの曲物が使用されていた。曲物の上には斜めに板材が載っている。また、井戸掘方内北側部分には、杭と直角に曲った板材の一部が検出されているので井側があった可能性がある。出土遺物は土師器皿・坛、内面黒色の土師器高台付壇などがある。Fig. 16-51・52は土師器皿である。51は口径10.7cm、底径8.1cm、器高1.3cmを測る。胎土には2mm大的石英・長石砂を少量含み、焼成は堅緻である。淡灰褐色を呈し、底面はヘラ切り放しで板目痕が付く。52も同様な土師皿で、復元口径10.3cm、底径7.6cm、器高1.3cmを測る。胎上は精良で、器色は

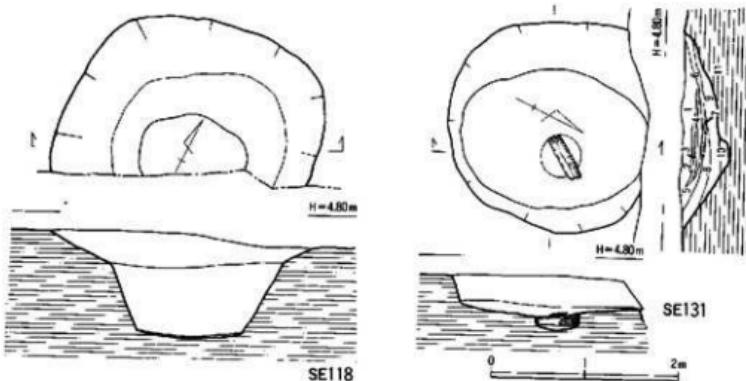


Fig.23 SE118・131遺構実測図(1/60)

淡茶褐色を呈する。焼成はあまり良くない。底面はヘラ切り放しの後板目痕が付く。53は高台付の内面黒色土師器壇である。底径7.8cm、残高2.5cmで、内面は暗黒褐色～淡茶褐色を呈し、ヘラ磨きが施される。胎土は精良で、焼成も良く堅緻である。10世紀後半から11世紀にかけてのものであろう。

S E141 (Fig.24, PL.33) 調査区西端部南寄りで検出した井戸である。西側の一部は未調査区に延びていて、西側の平面形がはっきりしない。長径4.0m、推定短径2.5mの楕円形を呈し、2段掘りになっている。上段底面には足跡状の窪みが観察される。井筒は素掘りでやや南側に片寄って掘り込まれている。径は1.2～1.3m前後である。井戸底までの深さは検出面から1.85mである。下部の基盤砂層まで達しているが湧水はみられなかった。土層堆積状況は、1表土、2淡灰褐色土（遺構部分はブロック状の灰色粘土塊がみられる。両端は砂質っぽい土壤）、3暗灰色・黒色粘土ブロック混入暗灰色砂質土（ブロックは10～20cm大）、4暗灰色、黑色粘土

ブロック混入暗灰色砂層（ブロックが小さく5cm前後である）、5暗灰色粘質土、6暗灰色砂層（落際に黒色粘土ブロック混入）、7黒灰色粘土ブロック混入砂質土、8黒灰色粘土ブロック混入砂層、9黒灰色砂層（最下にやや黄色の砂が1cm程度認められる。）遺物は極端に少なく、上師器の坏片が数点出土しているに過ぎない。

今回の調査で井戸が3基出土した。素掘りのS E118・141と井筒に曲物を用いるS E131とのふたつのタイプが存在する。S K132とした土坑も上層の堆積状態から井筒に曲物を用いる井戸であった可能性が高い。井筒に曲物を用いるタイプは浅い汲み井戸であろう。

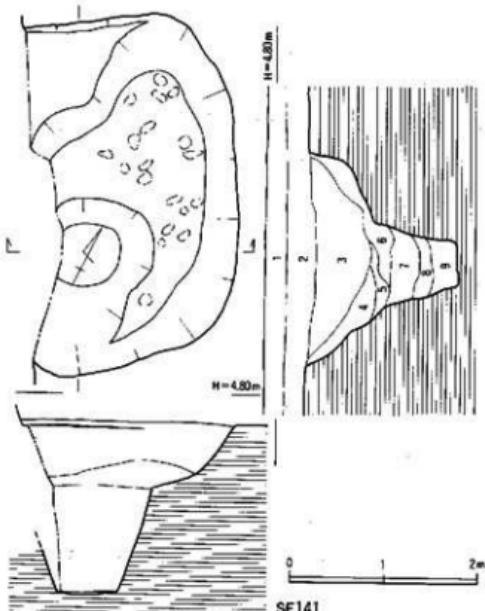


Fig.24 SE141構造実測図(1/60)

3 溝

SD 101 (Fig. 25~28, PL. 34・35・45・50) 調査区南東側から北西側に凹弧状を呈して流れる自然流路である。幅は広い所で4m前後あり、深さは0.4m前後である。これは調査面での数値で、断面観察によれば、実際は幅6m弱、深さ0.6m程度になっている。上層堆積状況はⒶ~Ⓐの南側で、1灰褐色粘質土、2暗灰色粘質土、3灰褐色砂質土、4灰色砂層となっている。1は上層、2は下層として遺物を取り上げている。SD 101の南側には滑状の堆積があり、土層堆積は次のようにになっている。1暗青灰色シルト質土、2暗青灰色粘質土、3白色砂層、4暗青灰色シルト質土、5青灰色シルト質土、6暗青灰色弱粘質土、7白色砂層、8暗青灰色シルト質土、8'灰白色砂層（8→8'漸移的変化）、9暗灰色粘質土、10暗青灰色シルト質土、11青灰色シルト質土、12白色砂層、13青灰色シルト質土、14青灰色シルト質土、15灰白色細砂層、16青灰色シルト質土、17黒色粘土混入灰色砂層、18黒色粘質土である。北端部Ⓑ~Ⓑの土層堆積は、1客土、2黒色土（黒灰を含む）、3淡黄灰色粘質土、4暗灰色粘質土、5黒灰色粘質土、6暗灰色粘質土、7暗灰色砂質土、8暗灰色砂質土、9・10灰色砂層となっている。4・5を上層、6を下層として取り扱っている。

出土遺物は、土師器皿・环・壇・内面黒色の高台付土師器壇、壺などがあり、木製品には木簡、斎串、曲物、機織具、建築部材などがある。造構確認面では越州窯青磁碗が出土している。

Fig. 27~65は土師器皿である。口径10.0~1.4cm、器高1.0~1.6cmを測る。62は淡灰褐色を呈し、器高がやや高い。胎土に2mm前後の石英・長石粒を多く含む。底面はヘラ切りで板目痕が付く。63~65は、胎土が精良で、63は淡灰褐色、64は茶褐色、65は淡黄灰色を呈する。65は焼成が良くない。底面は全てヘラ切りで、板目痕が付く。62は確認面出土、他は下層出土である。66・67は下層から出土した小型の环である。66は底径7.6cmで明茶褐色を呈し、底面はヘラ切り放しで板目痕が付く。67は口径12.4cm、器高3.0cmである。胎土は精良で淡灰褐色を呈する。底面はヘラ切りで板目痕が付く。68はI区上層から出土した环である。口径16cm、器高3.3cmを測る。胎土には1~3mm大の石英・長石粒を少量含み、明るい灰褐色を呈する。底面はヘラ切りである。69~71は内面黒色の高台付土師器壇である。69は底径8.3cmを測り、内面は暗黒褐色を呈する。胎土・焼成とも良好で、内面にはヘラ磨きが施される。70は口径14.7cm、底径6.4cm、器高6cmである。内面は黒色でヘラ磨きが施される。胎土・焼成とも良好である。71は口径16.8cm、底径6.6cm、器高6.3cmを測る。胎土には1mm大の石英・長石粒を少量含む。内面は黒色で、焼成は良い。69~71はともに下層出土である。72は越州窯青磁碗底部である。復元底径は10.2cmで露胎になっている。釉は緑灰色を呈する。確認面からの出土である。73は器形的に珍しい壺形を呈する黑色土師器である。口縁部と底部を欠失するので全形は分らないが頸部は細く括れる。肩部には推定3箇所の円形透孔がある。復元胴径9.5cmで、胎土・焼成とも良

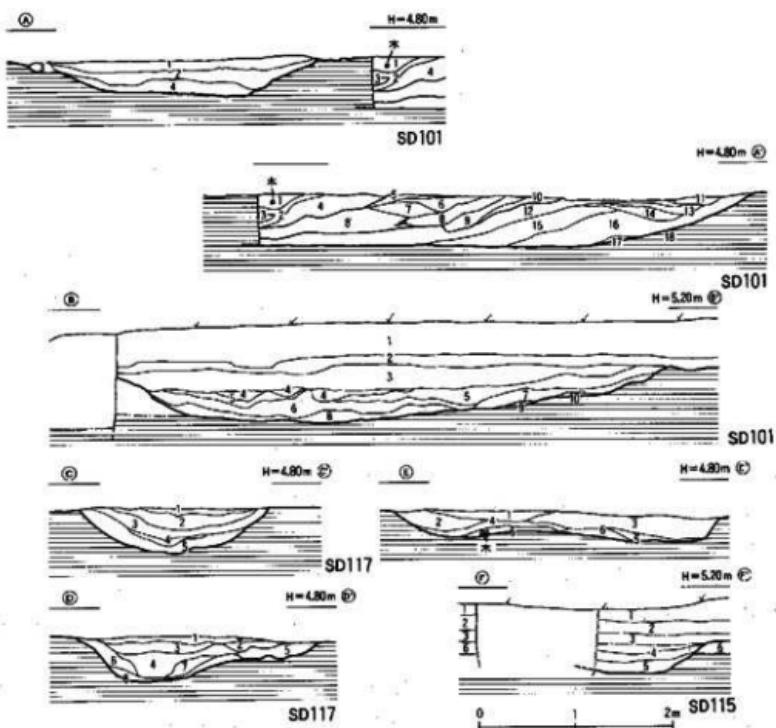


Fig. 25 SD101-115-117 土層断面実測図(1/60)

好である。外面には縦方向を中心とするヘラ磨きが施される。下層出土。74は斎車である。上部には切り込みがあり、先端部は尖る。残長15.9cm、最大幅2.4cm、最大厚0.3cmである。針葉樹の柵目材を使用している。II区下層からの出土である。また、石鍋片が1点出土している。SD101は出土遺物から10世紀後半代の時期ではなかろうか。

SD115 (Fig. 25・26・29, PL. 36・46・49) 調査区東側北寄りで検出した溝である。東北東から西北西へ延びるが、途中で途切れている。ちょうど真中に擾乱が切り合っており、擾乱によって大部分が破壊されている。幅1.8m、深さ0.25mである。土層堆積状況は東側壁面で観察したところによると、1表土、2暗灰色粘質土（旧水田耕作土）、3黄褐色土（水田底土、下半部は黄色味が少ない）、4黒色灰層（糞灰を中心とした灰層か。SD115の埋土）、5灰黑色粘質土（SD115の埋土）、6灰茶褐色粘質土（包含層）となっている。遺物は東側から多く出土

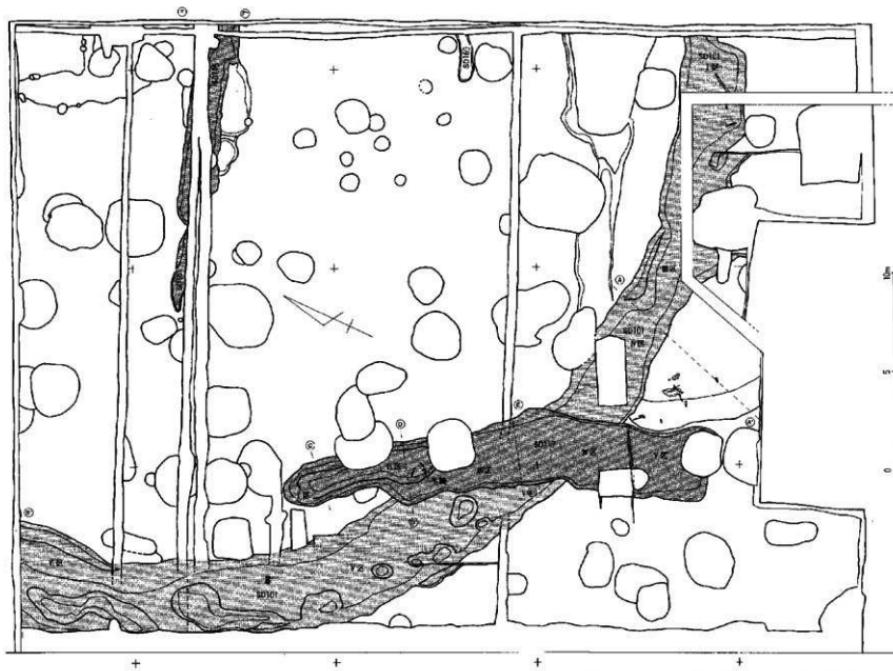


Fig.26 溝造構配図(1/200)

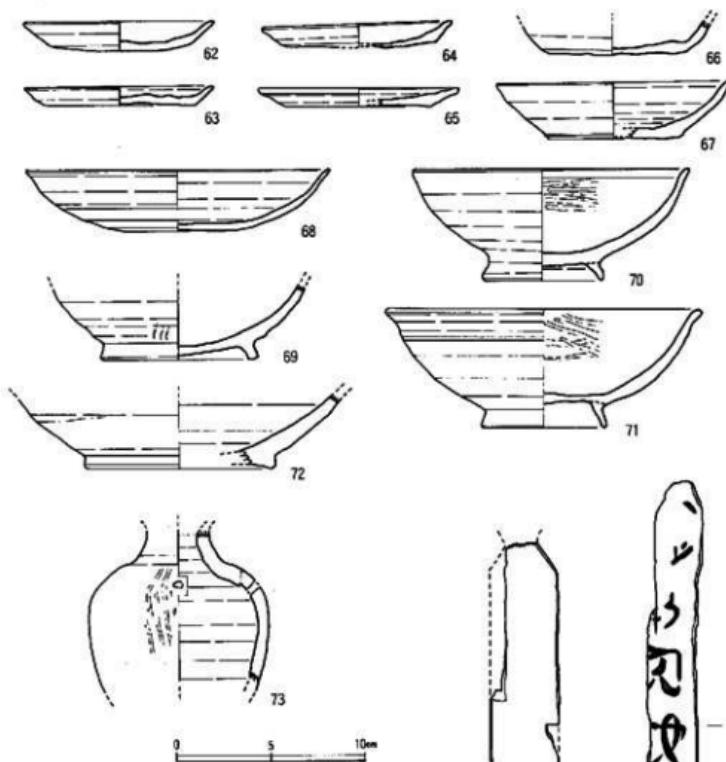


Fig.27 SD101出土遺物実測図(1/3)

しており、土師器皿・環・壺、内面黒色の土師器壺、粗製の甕、白磁、石鏡、砥石などがある。また、4層の黒色灰層からは炭化米が出土している。Fig. 29はSD115から出土した遺物である。76~78は土師器皿である。76は復元口径10.8cm、底径8.3cm、器高1.8cmを測る。灰褐色を呈し、胎上には1mm弱の石英・長石砂を少し含む。焼成はあまり良くなない。底面はヘラ切り放しの後板目痕が付く。77は

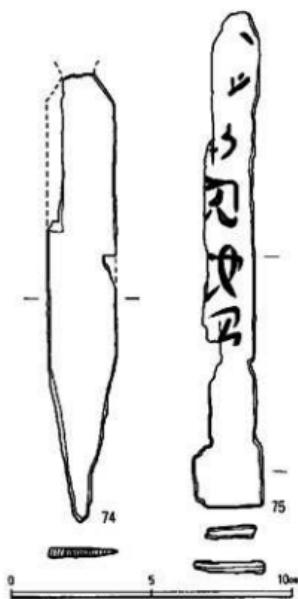


Fig.28 SD101・117出土寄串・木簡実測図(1/2)

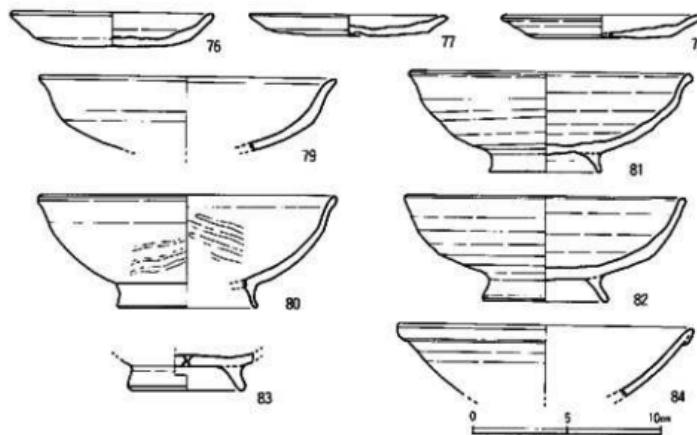


Fig.29 SD115出土遺物実測図(1/3)

浅い器形で、復元口径10.6cm、器高1.1cmを測る。淡灰褐色を呈し、胎土に1mm大の石英粒を僅かに含む。底面はヘラ切りで板目痕が付く。78も浅い器形で復元口径10.6cmである。胎土、色調とも77に類似している。79は环である。復元口径15.8cm、残高3.9cmである。淡灰褐色を呈し、胎土・焼成とも良好である。内面にはヘラ研磨が施される。80~82は高台付の壺である。80は口径16cm、底径7.6cm、器高6cmを測る。内外面とも暗黒褐色を呈し、ヘラ磨きが施される。胎土は精良で、焼成も良い。81は口径15cm、底径6cm、器高5.4cmである。淡灰褐色を呈し、胎土は精良であるが焼成が良くない。口縁端部が外反する。82は復元口径15cm、底径6.7cm、器高5.6cmを測る。器色は淡い黄灰色を呈し、胎土は精良であるが、3mm前後の石英粒を僅かに含む。焼成は良くない。83は底面に焼成後の穿孔を施した土師器高台付壺の底部である。底径6.3cmで、灰白色を呈する。周縁は再加工されて端面は丸味を持つ。穿孔は径5mmで両面から行なわれている。84は白磁碗である。復元口径15.8cm、残高3.8cmで薄手の玉縁口縁を有する。陶胎は乳白色で、釉はやや青味掛った透明釉をかける。SD115からの遺物出土量は割と多く、10世紀終りから11世紀にかけての時期であろう。溝覆土の水洗別によって炭化米が多く出土していることは注目される。

SD117 (Fig.25・26・28・30、PL.37・46・47・49・50) 調査区中央部に位置し、南東から北北西方向へ延びる溝である。連続する溝ではなく、長さ21mで収束している。幅は3.5mが最大で、最も深い部分は0.5mを測る。SD115とは直角方向に配置されており、何らかの区画溝の一部ではないかと考えられる。この溝の底から6文字分を書き込んだ木簡が出土している。

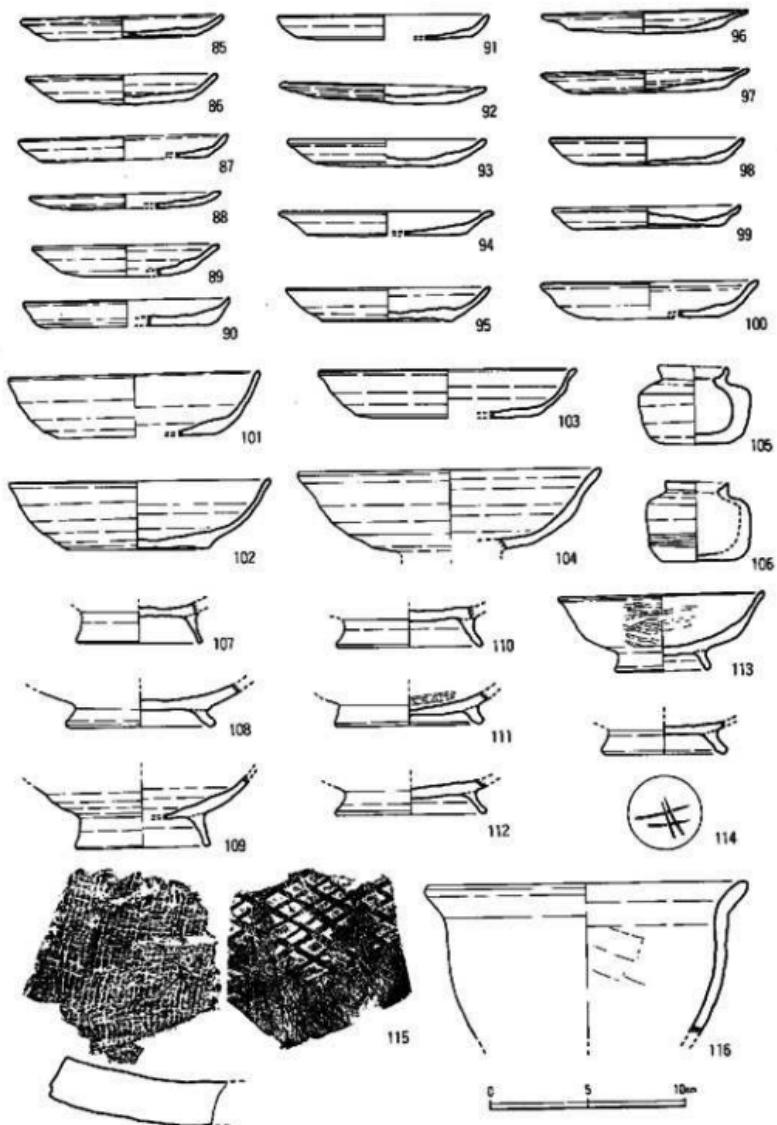


Fig.30 SD117出土遺物実測図(1/3)

土層堆積状況は3箇所で確認している。①-⑤は、1淡灰褐色砂質土、2黒色灰層(薰灰か)、3灰黑色粘質土、4黒灰色粘質土、5暗灰色砂層となっている。⑥-⑩では、1淡灰褐色砂質土、2淡灰褐色砂層、3黑灰色粘質土、4黑色粘質土(有機質含む。木器含む)、5暗灰色粘質土、6黑灰色砂質土、7黑灰色砂質土、8暗灰色砂層となっている。⑪-⑯では、1淡灰褐色砂質土、2暗灰色弱粘質土、3灰黑色粘質土、4暗灰色粘質土、5暗灰色砂層、6灰褐色砂層となっている。遺物はかなりまとまって出土している。上師器皿・壺・瓶・甕・ミニチュア壺・瓦、石鍋、滑石製石鍋再加工品、木簡などがあり、植物遺体としては、炭化米、ヒョウタン、モモなどが検出されている。5区の浅い部分では玉縁口縁の白磁片が混入していた。Fig.30-85-100は土師器皿である。細かく分ければ幾つかのタイプに分けられるが、大きくは口縁部が立ち上がって器高がやや高くなるタイプと口縁部が外方へ伸びて器高が低くなるタイプがある。口径9.8cm、器高0.8cmから口径11.2cm、器高1.9cmまである。器色は淡灰褐色を呈するものが多く、底面はへら切り放しで板目痕の付くものが多い。95には底部及び体部にススが付着しており、灯明皿として使用された可能性がある。101-103は壺である。口径13.1-13.4cm、器高2.5-3.5cmを測る。103には内外面にススが付着している。104は高台付土師器壺である。口径15.5cmで内外面とも黒色~黒灰色を呈している。105・106はミニチュアの壺である。105は下層出土で、口径3.7cm、胴径5.7cm、底径3.8cm、器高4.0cmを測る。胎土には4mm大の石英粒子を少量含む。器色は茶褐色を呈する。106はやや小振りであるが器高は105と変わらない。明茶褐色を呈し、よく類似した小型壺である。107-114は土師器高台付壺である。中層から下層出土のものが中心で

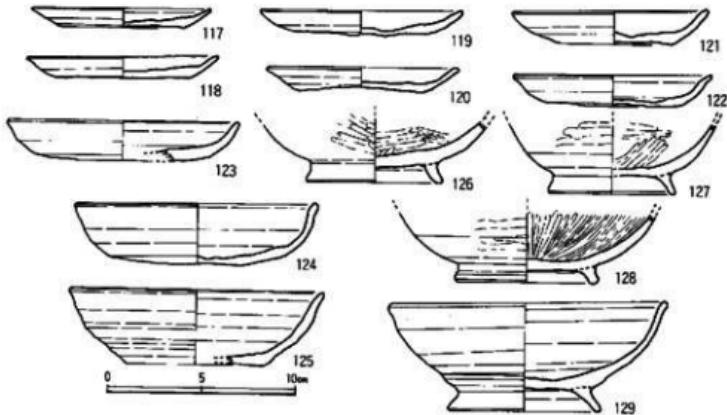


Fig.31 SX155出土遺物実測図(1/3)

ある。底径6.5~7.8cmで、108は内外面黒色、111は内面黒色の土師器壇である。ともに内面にはヘラ磨きが施される。113は口径10.6cm、底径5.0cm、器高4.0cmの黒色土師器である。胎土は精良で内外面ともヘラ磨きが施される。内面にはススの付着も認められる。114は外底面にヘラ記号を持つ。底径6.4cmである。115は斜格子タタキの平瓦である。上層出土。灰色を呈し、上面に布目痕が残る。奈良時代のものが混入したものであろう。周辺に同時代の瓦を使用した建物が存在したのであろうか。116は上層から出土した土師器壺である。復元口径16.6cmである。Fig. 28-75はIII区下層から出土した木簡である。残長17.7cm・最大幅2.5cm・最大厚0.5cmを測る。針葉樹の板目材が使用されている。墨文字6字分が確認できるが、現時点では解読できていない。PL. 49-161~164は滑石製石鍋片及び再加工品である。161・164は上層出土である。SD 117は出土遺物によれば10世紀終末から11世紀にかけての時期であると考えられる。

SD 161 (Fig. 5) SD 115の延長上にある深い溝である。方向はSD 115と同じであり、
-連の溝の可能性がある。遺物は土師器皿・环、内面黒色の土師器壺などが出土地している。

SD 169 (Fig. 5, PL. 36) 調査区東端部中央で検出した深い溝である。覆土から土師器の細片が数点出土地しているに過ぎない。部分的な検出のため全体の様子は判然としない。

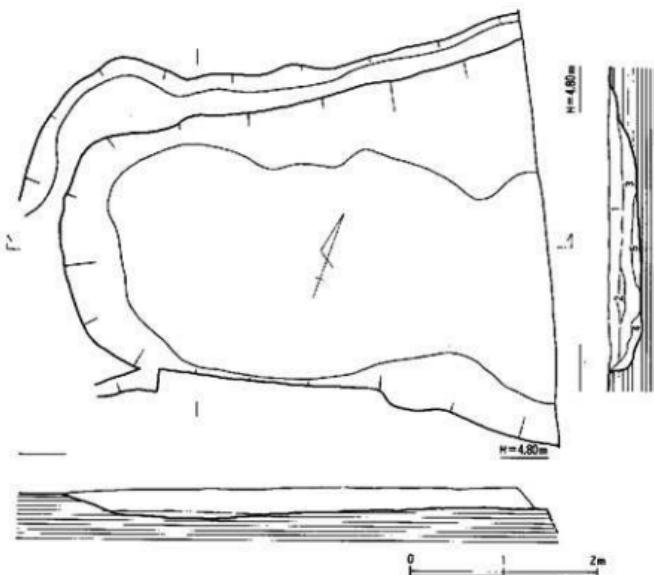


Fig.32 SX155遺構実測図(1/60)

4 溝状遺構

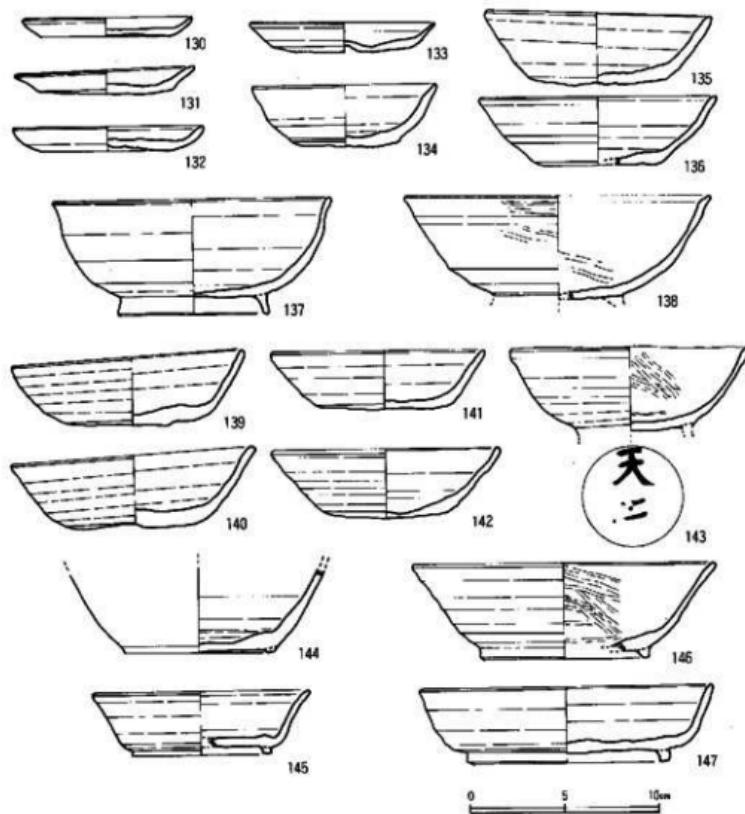


Fig.33 第II面他出土遺物実測図(1/3)

4 溝状遺構

S X 155 (Fig. 31・32, PL. 38・47~49) 調査区東端部南寄りで検出した大型の遺構である。東側は未調査区へ延びており、西側は浅い溝状の遺構に繋がっている。確認できている部分の規模は、東西5.6m、南北4.6m、深さ0.35mである。上層堆積状況は、1灰褐色砂質土、2暗灰色粘質土、3黒色粘質土、4暗灰色砂層、灰色砂層となっている。遺物は土師器皿、环・高

台付壺、滑石製石鍋片などが出土している。Fig.31-117-122は土師器皿である。117は口径9.6cm、器高1.1cmで淡灰褐色を呈する。内面にはススが付着する。検出面出土。118-122は口径10.1~10.6cm、器高1.3~1.9cmを測る。淡灰褐色~灰褐色を呈し、胎土は精良で、焼成も良い。底面はヘラ切り放しで、板目痕が付く。120と122には内面にカーボンが付着している。全て下層出土である。123~125は壺である。123は復元口径12.4cm、器高2.2cmである。底面はヘラ切りで、器色は灰褐色を呈する。胎土は精良である。124は口径12.8cm、器高3.3cmを測る。明るい灰褐色を呈し、胎土に2~3mm大的石英・長石砂を少量含む。125は復元口径13.5cm、底径7.2cm、器高4cmを測る。灰褐色を呈し、胎土・焼成とも良好である。底面は糸切りになっている。3点とも下層出土であるが、125は混入品であるかも知れない。126~129は下層出土の壺である。126は底径7.2cmで、内外面灰黒色を呈する。胎土は精良で焼成堅緻である。内外面ともヘラ磨きが施され、外底面には板目痕が付く。127も内外面黒色の土師器壺で、底径6.8cm、残高3.8cmを測る。胎土・焼成とも良好で、内外面にヘラ磨きが施される。128は底径7.6cmで、内面だけ黒色である。外面は横方向、内面は放射状にヘラ研磨が施される。胎土・焼成は他と同様良好である。129は口径14.8cm、底径8.2cm、器高5.9cmを測る。器色は淡灰褐色を呈し、胎土は精良で焼成堅緻である。PL.49-165は石鍋の破片である。S X 155は出土遺物から10世紀後半代から末頃にかけてのものであろうか。

5 第II調査面出土遺構

第I調査面の終了後、基盤となっていた砂層を掘り下げ、第II面目の調査を行なった。第I調査面の基盤となっていた土壤は、東側はシルト質土で、西側は粗い砂層であった。PL.39は粗砂の堆積状況である。斜方向の細かな流理が観察され、洪水などで短期間に埋没した状況を呈している。粗砂の中からは磨滅した須恵器片、土師器片が少量出土しているに過ぎない。

第II調査面は、標高4.15~3.65mで、水田址と大溝が確認されている。水田址は、黒色粘質土が基盤となって作られている。水田面は残りが良く、水田面に残された古代人の足跡は5本の指(PL.43)まで残っていた。畦畔の残りも良く(PL.41)、高さ10cm以上あった。畦畔はT字状に接合し、西側4面、東側1面の水田面が確認できた。1面の単位面積は計測可能なもので約173m²である。水路は幅16.3mの大溝であり、北から西に振れて北流する。旧地形図によれば条里地割に合致し、坪境になる可能性がある。溝底には4条の塗みが残り、緩やかに水が流れていることを想起させる。西側縁には護岸用の杭列(PL.41)が27mにわたって検出された。溝からは、曲物や横樋・桶・機織具などの木製品(PL.50)、土師器、須恵器(PL.42)などの土器類、ヒョウクン(PL.43)やモモ、ウリ類などの多数の植物遺体が出土している。

Fig.33は、第I面包含層や第II調査面から出土した遺物である。130~133は土師皿である。130~132はI面A4区包含層から出土した土師皿である。口径8.9~10.1cm、器高1.1~1.5cmを

測る。I30は粘土紐巻上げで、他は底面ヘラ切りである。全て淡灰褐色を呈する。I33は擾乱から出土した土師壺である。底面はヘラ切りで板目痕が付く。I34～I36は环である。I34は口径9.9cm、器高3.4cmでC 4区粗砂層上面から出土している。I35は遺構検出で出土した。口径12.1cm、底径7.4cm、器高4.1cmを測る。底面はヘラ切りで板目痕が付く。I36はA 1区水田面を覆う粗砂から出土した。口径12.6cm、器高3.6cmである。底面はI34と同様ヘラ切り放しである。I37はI面A 4区包含層から出土した土師器高台付壺である。口径14.8cm、底径8.1cm、器高6.1cmを測り、淡茶褐色を呈する。I38はS P 44から出土した内外面黒色の高台付壺である。口径10.2cmで、外面にはヘラミガキが施される。I39～I42はII面の大溝から出土した环である。I39はA 3区から出土した。口径12.4cm、器高4cmで、胎土に石英・長石砂を少量含む。明るい灰褐色を呈し、焼成は良好である。底面はヘラ切りで板目痕が付く。I40もI39とよく類似している。B 2区出土。口径13.1cm、器高4.2cmである。I41・I42はC 4区出土である。I41は口径11.4cm、器高3.1cm、I42は口径12.2cm、器高3.7cmである。共に淡黄褐色を呈する。底面はヘラ切りで板目痕が付く。I43は内外面黒褐色の高台付土師器壺である。大溝からの出土である。口径12.8cmで外底面に「天上」と墨書する。内面には丁寧なヘラ磨きが施される。胎土は精良で、焼成堅敏である。I44はII面A 4区出土で、土師器壺の底部か。I45はII面C 3・4区、I47はII面D 4区から出土した須恵器の高台付环である。I46はII面D 3区出土の内面黒色土師器壺である。口径16.2cmで、内面はよく研磨されている。

IV おわりに

今回の調査では、平安時代後期から末期にかけての遺構・遺物群を検出したが、遺物の中には一般集落にはみられない木簡が出土していることは極めて重要である。残念ながら残りが悪く判読できないが、6文字中下3文字は旁から類推すると「陶」「汝」「泊」もしくは「始」か。木簡の持つ意味は不明である。遺跡の立地する旧席田郡には、「和名抄」によれば平安期に石田、大国、新居の三郷があったとされる。「延喜式」兵部省式諸国駅伝馬条には、筑前十九駅のひとつに久邇駅がみえ、駅馬十疋を常置していた。柏原郡夷守駅から大宰府に向う途上の駅で「和名抄」に見える席田郡大国郷に所在したとされる。現段階では、郡や郷の確定もできていないが、席田郡内には駅や郡・郷などの公的な関連施設の遺構が存在する可能性がある。今後、周辺の調査が極めて重要になってくると考えられる。また、下層出土の大溝は、旧地形図によれば条里地割の溝と合致する。10世紀代の遺物が中心であるが、奈良時代から平安時代初めにかけての遺物も出土しており、水田址も含め古代の条里制と関係する可能性が高い。今後の調査を含めて検討が必要であろう。

P L A T E S



▲(1) 第1面調査区全景（北から）

▼(2) 第1面調査区全景（西から）



PL.2



▲(1) SK102遺構出土状況（北から）

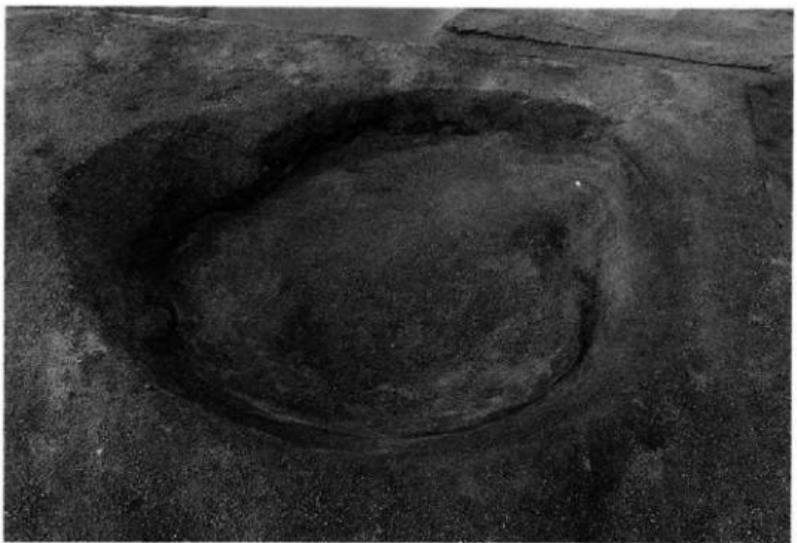
▼(2) SK102遺構出土状況（東から）





▲(1) SK104土層堆積状況（東から）

▼(2) SK104遺構出土状況（南から）





▲(1) SK105土層堆積状況（東から）

▼(2) SK105遺構出土状況（南から）



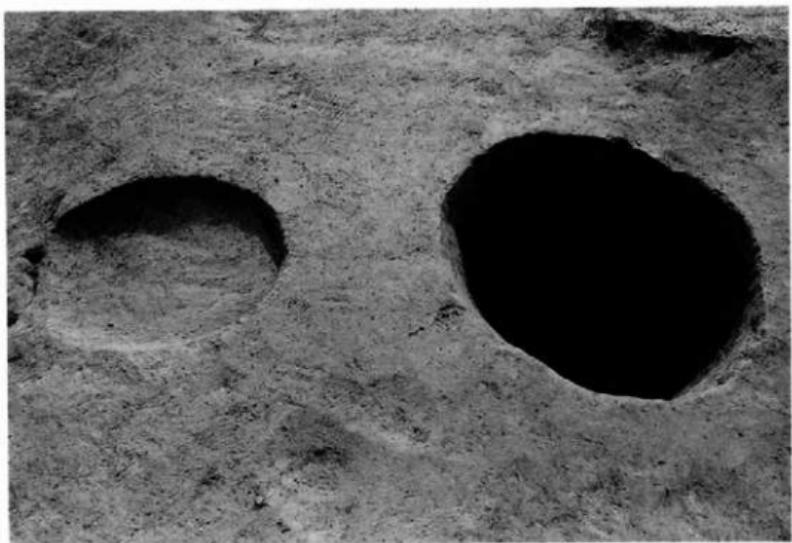


▲(1) SK106土層堆積状況（西から） ▼(2) SK107土層堆積状況（北から）





▲(1) SK108遺構出土状況（西から） ▼(2) SK109・110遺構出土状況（北から）





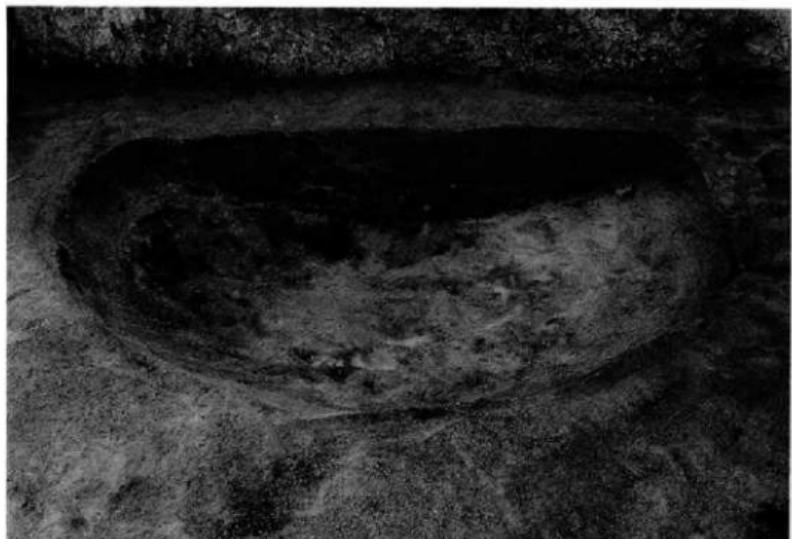
▲(1) SK111土層堆積状況（東から）

▼(2) SK111遺構出土状況（東から）





▲(1) SK112遺構出土状況（東から） ▼(2) SK113遺構出土状況（南から）





▲(1) SK114遺構出土状況（東から） ▼(2) SK116土層堆積状況（南から）





▲(1) SK119土層堆積状況（西から）

▼(2) SK120土層堆積状況（西から）





▲(1) SK121土層堆積状況（北から）

▼(2) SK121遺物出土状況（東から）





▲(1) SK122土層堆積状況（東から） ▼(2) SK123土層堆積状況（北から）





▲(1) SK124土層堆積状況（南から） ▼(2) SK125土層堆積状況（東から）





▲(1) SK126土層堆積状況（南から）

▼(2) SK126遺構出土状況（東から）





▲(1) SK127土層堆積状況（北から） ▼(2) SK127・128遺構出土状況（南から）





▲(1) SK129土層堆積状況（北から） ▼(2) SK130遺構出土状況（南から）





▲(1) SK134土層堆積状況（南から） ▼(2) SK134遺構出土状況（南から）

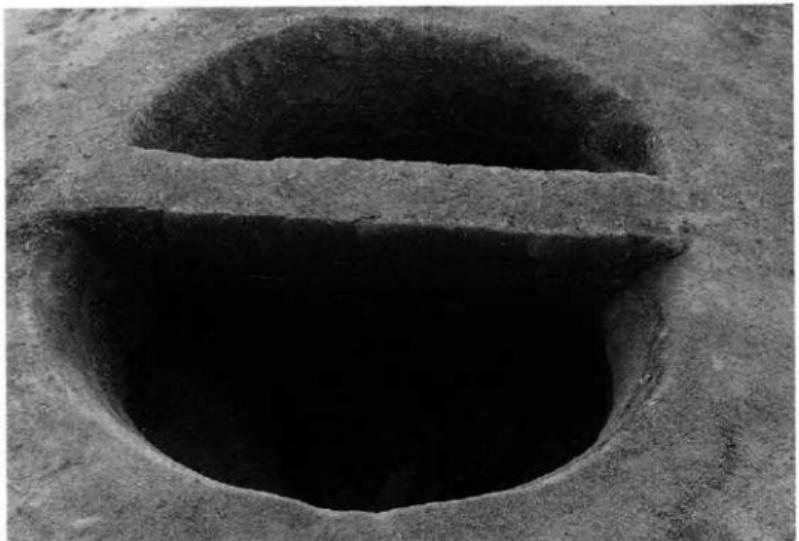




▲(1) SK137遺構出土状況（南から）

▼(2) SK142土層堆積状況（西から）





▲(1) SK143土層堆積状況（東から）

▼(2) SK143遺構出土状況（東から）





▲(1) SK146土層堆積状況（東から） ▼(2) SK147土層堆積状況（東から）





▲(1) SK148造構出土状況（西から） ▼(2) SK154土層堆積状況（北から）





▲(1) SK149土層堆積状況（南から）

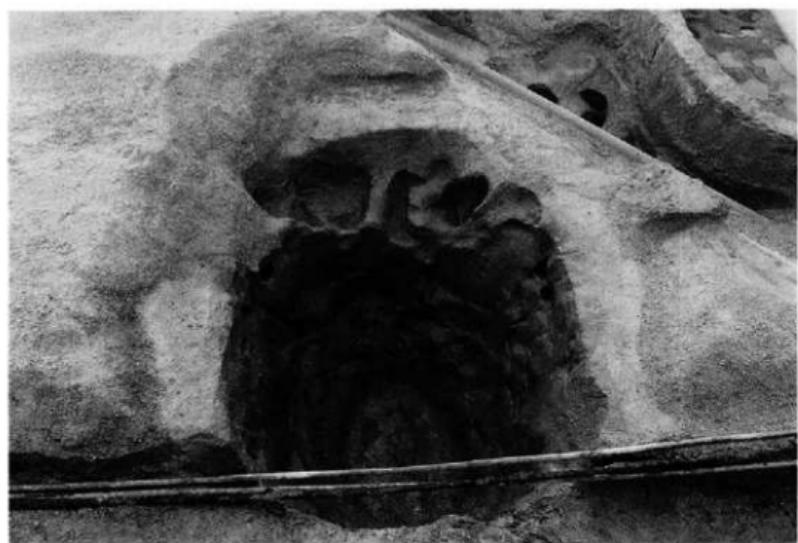
▼(2) SK149遺構出土状況（南から）





▲(I) SK151土層堆積状況（東から）

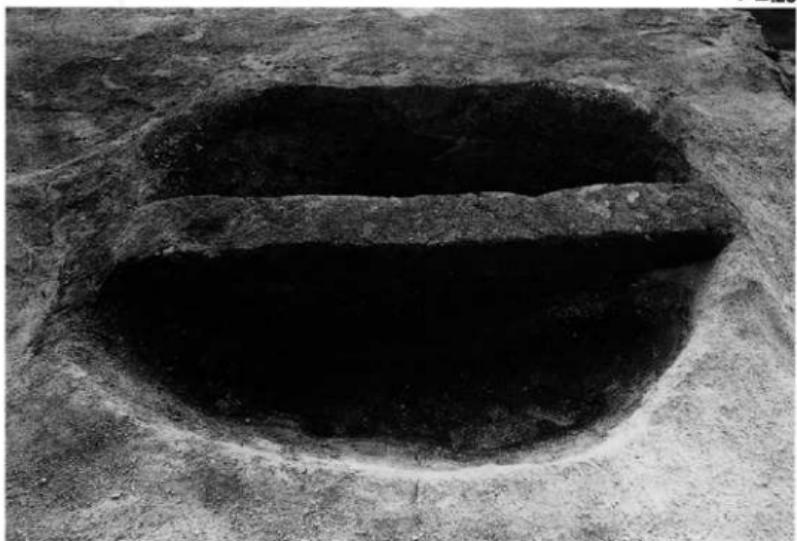
▼(2) SK151遺構出土状況（東から）





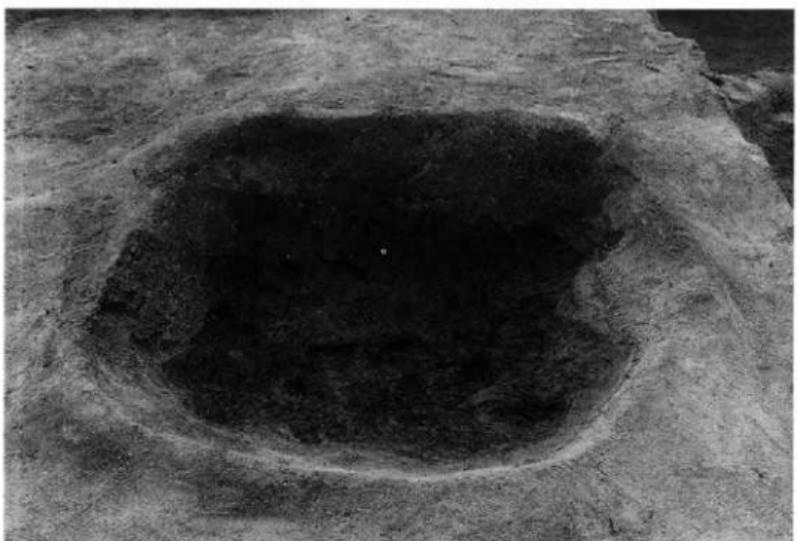
▲(1) SK152土層堆積状況（北から） ▼(2) SK152遺構出土状況（北から）





▲(1) SK153土層堆積状況（東から）

▼(2) SK153遺構出土状況（東から）





▲(1) SK158土層堆積状況（西から）

▼(2) SK158遺構出土状況（西から）





▲(1) SK162土層堆積状況（西から） ▼(2) SK162遺構出土状況（東から）





▲(1) SK164遺物出土状況（東から） ▼(2) SK165遺構出土状況（北から）





▲(1) SK166遺構出土状況（北から）

▼(2) SK175土層堆積状況（北から）

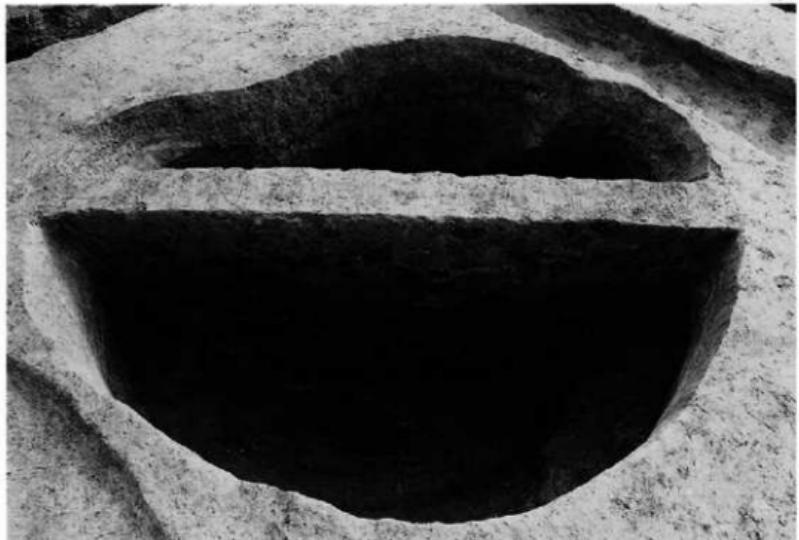




▲(1) SK167土層堆積状況（西から）

▼(2) SK167遺構出土状況（東から）





▲(1) SK170土層堆積状況（西から） ▼(2) SK170遺構出土状況（西から）





▲(1) SE118遺構出土状況（北から） ▼(2) SE131遺構出土状況（北から）





▲(1) SK132土層堆積状況（南から） ▼(2) SE141遺構出土状況（東から）



PL.34



▲(1) SD101IV区土層堆積状況（西から） ▼(2) SD101北壁土層堆積状況（南から）





▲(1) SD101 II 区木製品出土状況 (東から) ▼(2) SD101 V 区木製品出土状況 (北から)





▲(1) SD115土層堆積状況（西から） ▼(2) SD169遺構出土状況（西から）





▲(1) SD117北側土層堆積状況（北から） ▼(2) SD117Ⅲ区木簡出土状況（北から）





▲(1) SX155土層堆積状況（東から） ▼(2) SX155遺構出土状況（東から）





▲(1) 調査区中央部基盤粗砂堆積状況（南から） ▼(2) 調査区中央部基盤粗砂堆積状況（西から）





▲(1) 第II面調査区全景（北から）

▼(2) 第II面調査区全景（西から）





▲(1) 第II面杭列出土状況（南から） ▼(2) 第II面水田畦畔出土状況（南から）





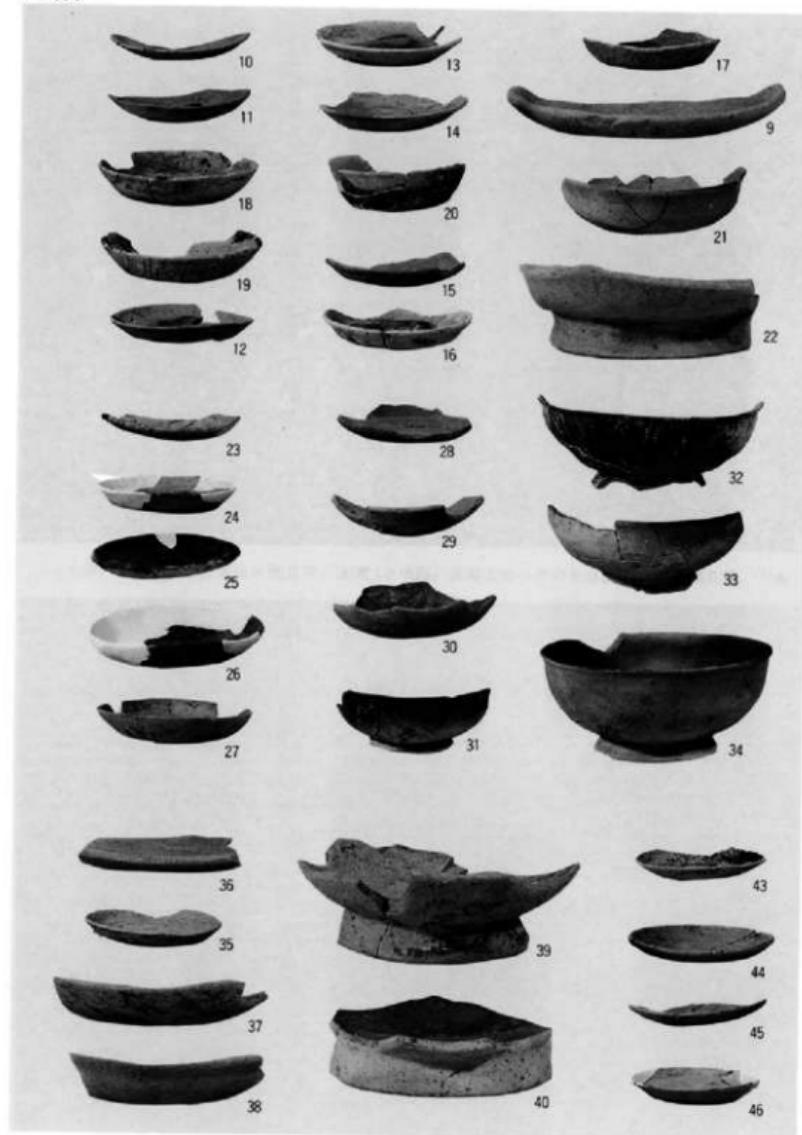
▲(1) 第II面B2区遺物出土状況（西から） ▼(2) 第II面B2区水田面遺物出土状況（西から）





▲(1) 第II面B2区水田面ヒョウタン出土状況（西から）▼(2) 第II面水田面足跡出土状況（南から）





出土遺物 (I)

9~22: SK102上層 23~34: SK102下層 35: SK112 36: SK114
37~40: SK111 43~46: SK130



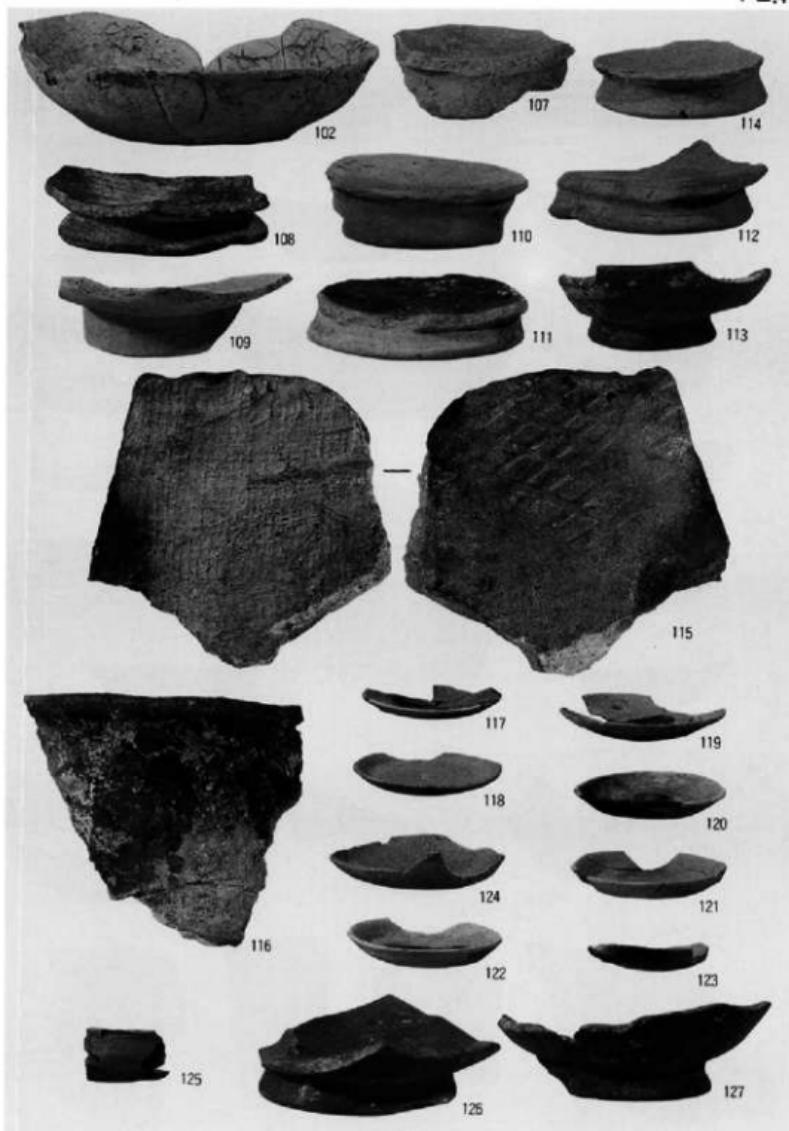
出土遺物 (2)

41~42~47~50 : SK130 51~53 : SK131 54 : SK133 55 : SK132
 56 : SK154 57 : SK157 58 : SK158 (下層) 59~60 : SK174 60 : SK166
 61 : SK164 62~73 : SD101



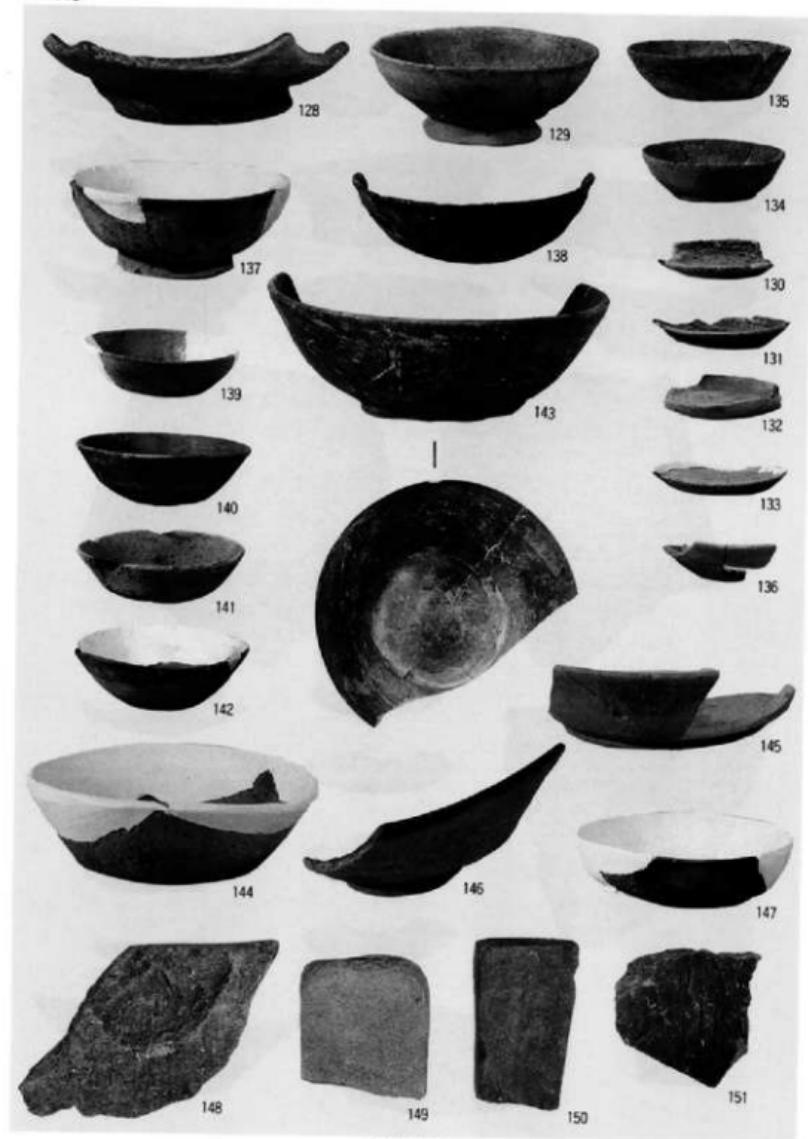
出土遺物 (3)

75~84 : SD115 85~101・103~106 : SD117



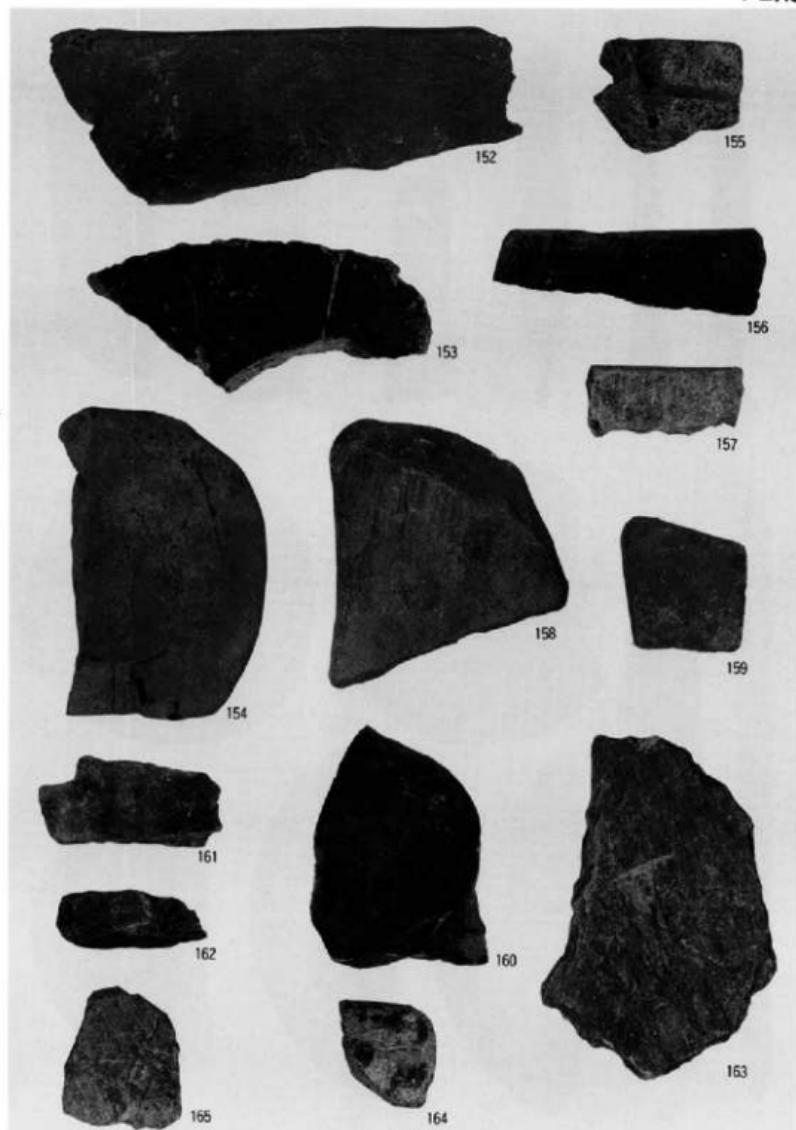
出土遺物 (4)

102・107・116: SD117 117・127: SX155



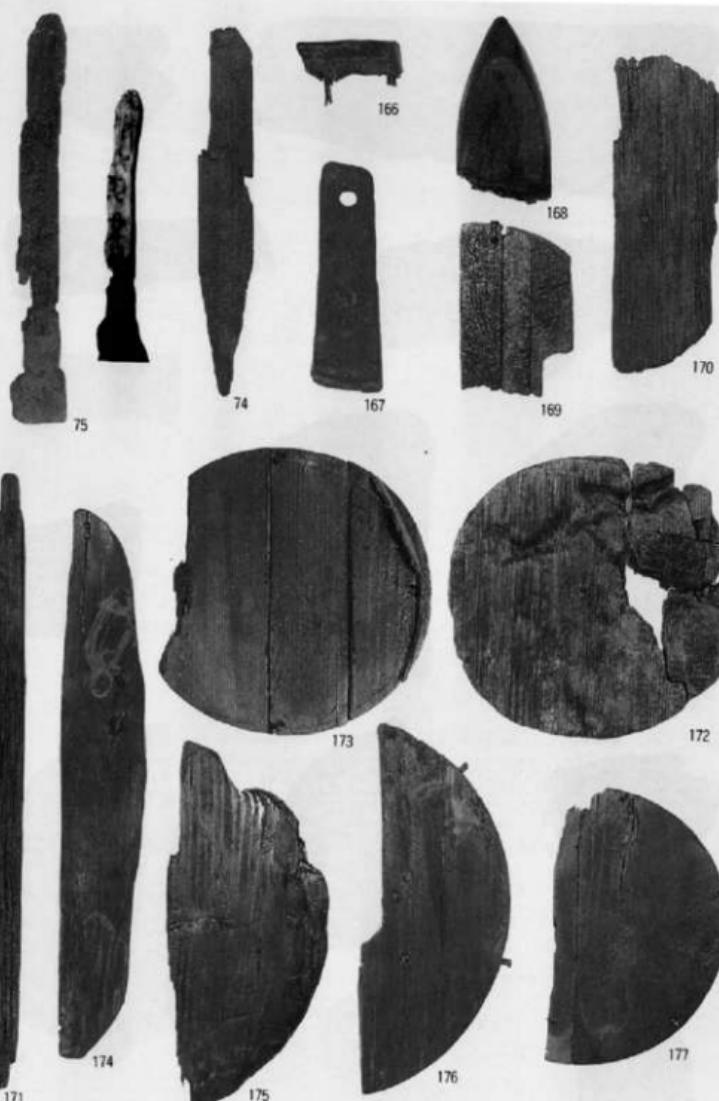
出土遺物 (5)

128・129: SK155 130-147: 第II面他 148-150: SK130 151: SK131



出土遺物 (6)

152 + 153 : SK132 154 : SK175 155~160 : SD115 161~164 : SD117 165 : SX155



出土遺物 (7)

170 : SK121 74 + 168 + 171 + 172 : SD101 166 + 169 : SD102 75 : SD117 173~177 : 第Ⅱ面

雀居遺跡1

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第322集

平成5年(1993)3月31日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神一丁目8-1
(092)711-4667

印刷 桃松古堂印刷